

第12回企画展「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略 —アジア太平洋戦争開戦80年—」記録 展示パネル解説

椎名 真帆

明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

館長ごあいさつ

2021年はアジア太平洋戦争（1941～1945年）の開戦から80年目にあたります。この戦争は一般に対英米戦争として捉えられがちですが、この戦争の最中も日中戦争は続いていました。

本企画展では、アジア太平洋戦争前からの日中戦争にさかのぼりつつ、大戦中も継続して展開されていた様々な対中国謀略に焦点をあてて、参謀本部と登戸研究所が果たした役割について検証します。《謀略》とは、秘密戦の4要素（防諜・諜報・謀略・宣伝）の一つであり、戦争を有利にするために行われる相手^{かくらん}を攪乱する行為のことです。

武力戦と並んでアジア太平洋戦争前から行われた対中国謀略には、大きく分けて政治謀略と経済謀略があります。政治謀略の最たるものは、中華民国国民政府（蔣介石^{しょうかいせき}政権）からその実力者の一人である汪兆銘^{おうちやうめい}を日本側に取り込んで、蔣政権の分裂・弱体化を図るもので、これは1940年3月の汪兆銘政権の成立を経て、「梅機関」（影佐機関）によって継続されました。この汪政権の支配基盤を確固たるものにしようという地域支配のための工作^{せいこう}が「清郷工作」です。

また、経済謀略として特に重要なものが、登戸研究所もそれを担った偽札の散布です。経済謀略は、元々は日本軍占領地における通貨工作として始まり、日本側の傀儡^{かいらい}政権の通貨（例えば汪政権の儲備券^{ちよびけん}）や日本軍の軍票を流通させて蔣政権側の法幣を駆逐しようとするものでしたが、なかなかうまくいきませんでした。そのため、日本軍は、蔣政権の紙幣の偽札を大量に散布することで中国経済を混乱させ、あわせて日本側の物資調達を図るといった新たな経済謀略に力を注ぎました。

本企画展では、アジア太平洋戦争中も展開された対中国謀略の実態について検証し、対英米戦争の根源にある日中戦争について認識を深め、戦争というものの諸側面について振り返るための一助としたいと思います。

明治大学平和教育登戸研究所資料館長 山田 朗

(1) 参謀本部の期待と登戸研究所の拡大

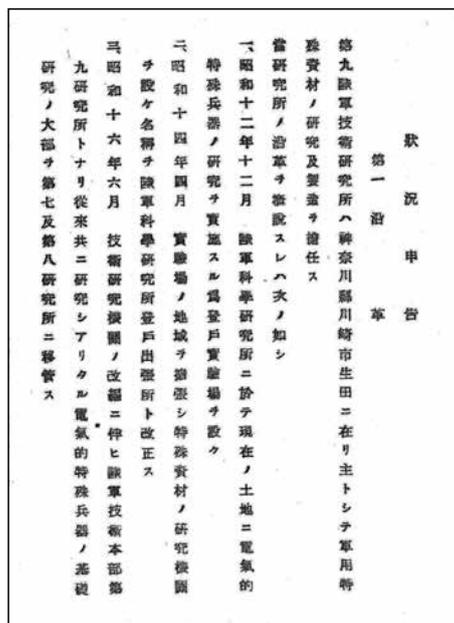
盧溝橋事件が起こった1937年、陸軍科学研究所登戸実験場が電波兵器開発のため生田の地に設置された。これが登戸研究所の起こりである。

日中戦争の局面が悪化すると、陸軍内では中国経済を壊滅に陥れて戦争を終結させるという構想が生まれ、参謀本部でも経済謀略が画策された。登戸研究所ではその一端を担うため、特殊工作遂行のための資材・兵器開発が一層期待され、さらに、敵対する蒋介石政権が発行する紙幣（=法幣）の偽造を行うことになった。その結果として、1939年、登戸実験場には秘密戦資材（兵器）開発部門である第二科と偽札製造部門である第三科が設置され急拡大し、「陸軍科学研究所登戸出張所」となった。



第二科：秘密戦兵器開発
第三科：偽造法幣製造

第2図 1939年に新設された科
(1941年撮影航空写真(国土地理院所蔵)をもとに筆者加工)
この後、敗戦まで登戸研究所は拡大を続け、最終的には写真右手の丘陵へも敷地を拡げた。



第3図 状況申告(部分)
(当館所蔵/作成者不詳, 登戸研究所幹部か)
沿革によれば、1939(昭和14)年頃からの組織の拡大とともに登戸研究所の性質が変わったことを明示している。

(2) 謀略に使用された登戸研究所の秘密兵器

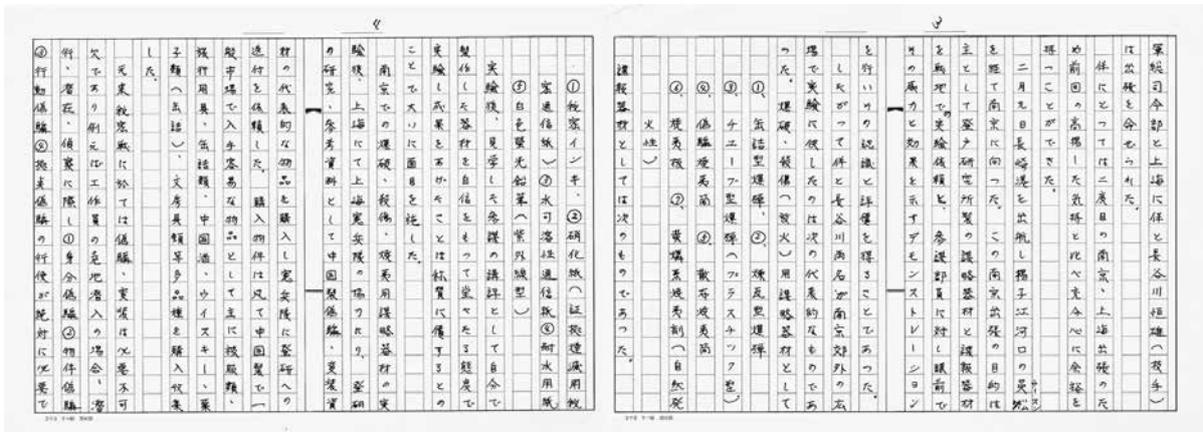
日中全面戦争下では、登戸研究所の秘密戦兵器開発部門の前身、陸軍科学研究所 篠田研究室に対し参謀本部からの要求が増大し、研究内容も人員も膨らんだ。そこで篠田研究室は新宿・百人町の科学研究所から分かれ生田の地に移動し、登戸出張所の第二科となった。篠田研究室の主任であった篠田鐮は陸軍科学研究所登戸出張所長に就任した。

第1表は、初期から秘密戦兵器研究開発に携わった登戸研究所第二科第一班長 伴繁雄の中国への出張記録である。ここからも、第二科の変遷と、第二科に対し徐々に増大した参謀本部からの要求がうかがえる。中でも表中、1940年の南京、上海への出張目的・内容は、2. - (2)で後述するとおり、影佐機関(別名「梅機関」)が行った謀略において直接必要とされた可能

性を想起させ、参謀本部と登戸研究所との密接な関係を示唆している。

第1表 登戸研究所第二科第一班長 伴繁雄の中国への出張記録 (筆者作成、参考:伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』ほか)

年月日	行先	出張目的・内容
1927 (昭和2) 年 4月 伴繁雄、浜松高等工業学校卒業後、		陸軍科学研究所に採用、 ^{しのだりょう} 篠田鎌のもとで秘密戦兵器開発開始
1937 (昭和12) 年 11月9日-25日	中華民国: 上海	戦闘中の上海で秘密戦のノウハウや技術を習得
1938 (昭和13) 年 11月4日-12月6日	満州国: 新京, ハルビン	参謀本部から篠田に出張命令、伴は助手として同行/新京で関東軍憲兵に秘密戦講義・実習などを実施/教育内容:科学的秘密通信法および発見法、郵便検閲法ほか
1939 (昭和14) 年 9月		陸軍科学研究所 篠田研究室が生田へ移動、陸軍登戸研究所 (出張所) 第二科となる →陸軍省軍務課による秘密戦兵器の製造・調達体制の整備完了
同年 9月4日-10月20日	満州国	関東軍情報部からソ連・満州国境での秘密戦技術的要望を受ける/兵器化の要望内容:敵軍用犬からの追跡防避剤 (エ号剤)、潜行行動資材としての補力剤 (軽量携帯食料、強力栄養剤、頭脳と目の補力剤、疲労回復剤) など
1940 (昭和15) 年 2月3日-3月4日	中華民国: 南京, 上海	南京・上海における戦地での登戸研究所製謀略兵器・資材の実験とデモンストレーション→主として汪兆銘政権の勢力拡大を目指す工作目的か? 実験器材:爆破・殺傷 (放火) 用謀略資材としての缶詰型爆弾、レンガ型爆弾、秘密通信手段としての秘密インキ、秘密通信用紙、紫外線型白色蛍光鉛筆など
1941 (昭和16) 年 5月9日-6月28日	中華民国: 南京	参謀本部からの命令で、中支那防疫給水部で中国の捕虜に対し青酸化合物 (登戸研究所製青酸ニトリルなど) の人体実験
1942 (昭和17) 年 12月20日-翌年1月16日	中華民国: 上海	上海の特務機関で二度目の青酸ニトリルの人体実験 ⁽¹⁾



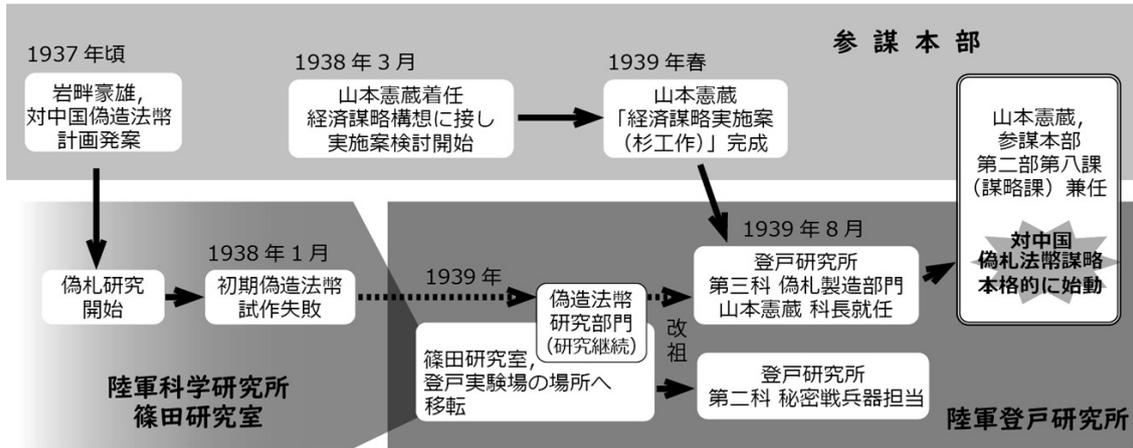
第4図 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』原稿 (部分) (当館所蔵/作成者 伴繁雄ほか)

昭和15年3~4月にかけて南京と上海における戦地での登戸研究所製謀略兵器・資材の実験とデモンストレーションのため、伴らが出張に行ったことが書かれている。

(3) 登戸研究所に偽札製造部門が設置された理由

参謀本部主導の偽札謀略の「兵器」である偽札の製造部門が登戸研究所に設置されたのは次のような背景があった。

中国の経済を崩壊させるため「偽札をばらまくことで、法幣の勢力を弱める」という謀略は、1930年代には参謀本部の岩畔豪雄が発案し、極秘裏に進められていた⁽²⁾ 計画を、当時、参謀本部第七課 (別名・支那課) の山本憲蔵が1939 (昭和14) 年春に工作実施案を完成、本格化させた。登戸研究所は、その前身である陸軍科学研究所 篠田研究室の時代から、従来の兵器



第5図 登戸研究所に偽札製造部門が設置されるまで（筆者作成，参考：山本憲蔵『陸軍贋札作戦』ほか）

の枠に収まらない新しい兵器開発研究を全て引き受けており，山本による具体案の立案以前から内閣印刷局の技師を引き抜き，すでに偽造法幣の研究を開始していた⁽³⁾ため，岩畔は，当初より登戸研究所で偽札を製造することを決定していたと考えられる。

そこで，登戸研究所に偽札製造部門が設置され，現場責任者として山本憲蔵が登戸研究所第三科長に就任し，工作を進めやすいよう参謀本部の第二部第八課（別名・謀略課）課員も兼任した。したがって偽札製造は，参謀本部の対中国经济謀略構想に組み込まれていた謀略のひとつであり，参謀本部がこの偽札製造を主導したということは当然のことと言える。

部所別	直接研究費	人件費	研究費	研究費計	一般旅費	特種旅費	旅費計
総務部	4,000.00	11,000.00		15,000.00	7,000.00		22,000.00
第一課	11,000.00	11,000.00		22,000.00	7,000.00		29,000.00
第二課	11,000.00	11,000.00		22,000.00	7,000.00		29,000.00
第三課	10,000.00	10,000.00		20,000.00	7,000.00		27,000.00
第四課	11,000.00	11,000.00		22,000.00	7,000.00		29,000.00
第五課	11,000.00	11,000.00		22,000.00	7,000.00		29,000.00
第六課	11,000.00	11,000.00		22,000.00	7,000.00		29,000.00
第七課	11,000.00	11,000.00		22,000.00	7,000.00		29,000.00
第八課	11,000.00	11,000.00		22,000.00	7,000.00		29,000.00
合計	117,000.00	117,000.00		234,000.00	77,000.00		311,000.00

備考：「一 大田命令ニ依ル旅費ハ本表外トシ列ニ申請合連ヲ受ケルモノトス
 「二 登戸出張所人件費ハ特種経費中ヨリ支弁シ製造関係経費ハ本表外トス
 「三 福託研究費及北滿試験廠試験ニ要スル兵隊費，旅費共ニ本配當ニ包含ス
 「四 本部豫備ハ兵隊費五〇万圓，旅費四万五千圓トシ本表外トス

第6図 「昭和十七年度所要経費配当表」陸軍技術本部 1942年5月11日，2，3頁目

（防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref.C15120584800）

備考に，「二，登戸研究所人件費は特種経費中より支弁し製造関係経費は本表外とす」とある。

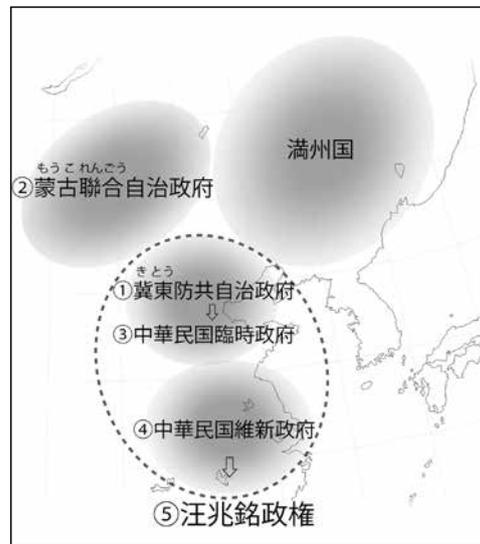
登戸研究所の秘密戦兵器，偽札の製造に関する経費は，別途支給されていた。

2. 日中全面戦争と登戸研究所

ここでは参謀本部が構想していた対中国謀略の大きな枠組みと、組み込まれていた各工作を明らかにする。

(1) 汪兆銘工作以前

1937（昭和12）年12月、当時の中国国民政府の首都・南京の攻略に日本国内は戦勝ムードに沸き、軍も民間も積極的な拡大思想が大方を占めていた。しかし、当時の日本の実情は、中国での戦争の長期化に耐えられる余力はなく、さらには抗日運動の激化により占領地でも民心を掌握できなかった。そのため、陸軍は現実的には、「敵対する蒋介石の国民政府との早期問題解決」を目指していたと考えられる。



第7図 満州事変以降中国大陸において日本軍が擁立した傀儡政權（筆者作成，白地図出典：© craftmap.box-i.net）

しかし、有利な立場での幕引きを狙った日本の思惑どおりには進まなかった。そこで日本は、かろうじて得た占領地で、内戦などで失脚した中国人政治家らを利用し、中国国内に傀儡政權を成立させた。その中で日本の発言力を確保し、占領地の経営・開発は中国人に行わせつつ既得権を確保しようとした。

また、傀儡政權があるところでは経済謀略が行われた。傀儡政權が勢力を確立するには、独自の通貨を発行し他の勢力を経済面から駆逐する謀略は常套手段であった。またその通貨を浸透させるために、抗日戦線を刺激しないことが重要で、且つ日本の戦時インフレを進行させないようするには、中国人によって中国で発行される形をとる必要があった⁽⁴⁾。

では満州国成立以降に日本軍が擁立した主な傀儡政權とそこで発行された通貨を概観する。

① 華北分離工作

満州国建国後、日本陸軍は、満州国に隣接する、鉄などの資源が豊富な華北に勢力を拡大した。1935年には関東軍司令部付奉天特務機関長 土肥原賢二を中心とし、北平（現・北京）や天津を含む河北省、青島を含む山東省など5つの省を蒋介石の国民政府から分離させ「第二の満州国」を目指し、「冀東防共自治政府」（のちに「冀東自治政府」と改称）に統治させようとした。しかし、この政府はわずかな地域を統治したのみで、後年、中華民国臨時政府に合流した。

② 蒙古聯合自治政府

駐屯する日本軍により1937年に内蒙古（南モンゴル）に設立された。首府は張家口，首班はテムチュクドンロブ（徳王）で、「蒙疆銀行券」を発行した。

③ 中華民国臨時政府（のちの華北政務委員会）—北平（北京）

1937年に北平を占領した陸軍は天津を含めた周辺地域を統治する「中華民国臨時政府」を傀儡政権として設置，首班に，北伐で蒋介石に敗れ隠棲していた王克敏を担いだ。

当初，日本軍は華北で植民地の通貨である朝鮮銀行券を軍票として使用したが，戦時インフレを進行させないよう，中国で通貨を発行するため「中国聯合準備銀行」を設立，「中国聯合準備銀行券」（聯銀券）を物資調達に使用した。しかし奥地での調達には蒋介石政府の法幣しか使用できず，流通は極めて限定的であった。

汪兆銘政権に統合後も「華北政務委員会」と改称され存続した。華北は日本軍の力で制圧できていた特殊性が尊重されたため，汪政権にとって障害になった。



第8図 王克敏と中国聯合準備銀行券
(王克敏写真出典：『最新支那要人伝』，中国聯合準備銀行券：当館所蔵)



④ 中華民国維新政府—南京

1938年，梁鴻志を行政委員長として担ぎ，成立させた。英米資本や民族資本が集中する上海を含む華中は，日本が軍の力で制圧できていた華北とは比較にならないほど抗日意識が熾烈で，民衆への影響力はほぼ皆無であった。のちに汪兆銘政権に吸収された。

中央銀行とは性質が異なるが，「華興商業銀行」を設立，兌換券である「華興商業銀行券」（華興券）を発行した。

⑤ 汪兆銘政権—南京

蒋介石の国民党重慶政府から脱出させた汪兆銘に，参謀本部 影佐禎昭の「影佐機関」（別名「梅機関」）の工作により南京に国民政府として「還都」させ，1940年に打ち立てたのが汪兆銘政権である。

影佐らはこの勢力を確固たるものとするため，南京・上海・杭州周辺では「清郷工作」を行った。



第9図 汪兆銘と中央儲備銀行券
(汪兆銘写真出典：『最新支那要人伝』，中央儲備銀行券：当館所蔵)



経済面では、「中央儲備銀行」を設立、法幣を駆逐できるよう「中央儲備銀行券」(儲備券)を発行したが、信用を得るのは困難であった。

(2) 影佐機関(別名「梅機関」)が行った謀略

中華民国成立直後、汪兆銘はその建国の父・孫文の側近として活躍したが、日中全面戦争の頃には孫文が結党した中国国民党は蒋介石が主導していた。その蒋介石政権でナンバー2の地位にあった汪兆銘を担ぎ出し政権を打ち立てさせたのが、参謀本部の影佐禎昭が指揮する影佐機関であった。

① 影佐禎昭の人物像

影佐は頭脳明晰、中国通として有名で、日中戦争の早期解決を目的⁽⁵⁾として1937(昭和12)年に設置された参謀本部第二部第八課(謀略課)の初代課長を務めた。

第2表 影佐禎昭略歴 (筆者作成、参考：浅田百合子『日中の架け橋 ～影佐禎昭の生涯～』ほか)

1893(明治26)年3月7日	旧浅野藩士(広島)の家系に生まれる
1914(大正3)年5月	陸軍士官学校卒業(第26期)
1923(大正12)年11月	陸軍大学校、優等で卒業(第35期)
1924(大正13)年12月	参謀本部付(作戦課)勤務
1925(大正14)年4月～	陸軍派遣学生として東京帝国大学政治学科聴講(3年間)
1929(昭和4)年3月～	参謀本部付中国研究員として中国各地に駐在(3年間)
1937(昭和12)年11月	参謀本部第二部第八課(謀略課)*設置、初代課長に就任(当時大佐)
1938(昭和13)年6月	陸軍省軍務局軍務課長に就任
1939(昭和14)年3月	汪兆銘工作開始
同年8月	少将に進級、影佐機関(別名「梅機関」)設立
1940(昭和15)年11月	汪兆銘政権最高軍事顧問就任
1942(昭和17)年5月	軍事顧問解任、戦地を転々と移動
1943(昭和18)年6月	第38師団長(南太平洋ニューブリテン島ラバウル)
1946(昭和21)年5月	復員
1948(昭和23)年9月10日	戦病死、享年55歳

*参謀本部第二部第八課(謀略課)発足時の陣容

大佐 影佐禎昭…汪兆銘工作首謀者

中佐 唐川安夫…次期第二部第八課長

中佐 岩畔豪雄…偽造法幣工作発案者

中佐 臼井茂樹…桐工作(対重慶工作)首謀者

汪政権成立後は政権の最高軍事顧問に就任した。しかし、当時の首相兼陸軍大臣 東条英機からは、影佐は中国に対して寛大すぎる⁽⁶⁾、と政権顧問から外され、1943(昭和18)年には南太平洋のニューブリテン島ラバウル戦線に左遷された。

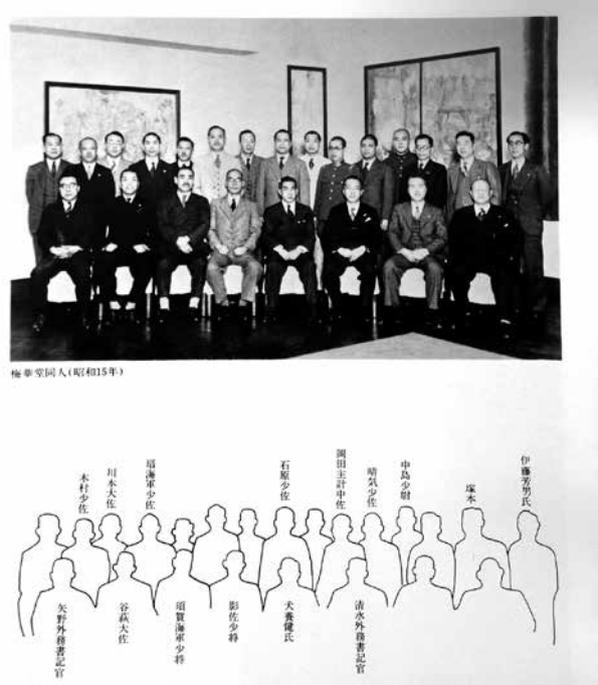
ラバウルでは、影佐機関で行った事がらを含む中国大陸での活動の回想を手記「曾走路我記」に記している⁽⁷⁾。それによれば、自身は日中関係研究のため派遣された中国北部で、深刻に感じた中国での排日思想の広まりに憔悴とし、強硬策から現実路線へ転換したことを示唆している。

なお、陸軍士官学校26期は、参謀本部第二部第八課（謀略課）初代課長 影佐禎昭，登戸研究所長 篠田籙，中野学校初代校長 秋草俊と，秘密戦の作戦考案・兵器開発・人材育成という秘密戦実行のための重要機関のトップ経験者を輩出している。

② 影佐機関（別名「梅機関」）とは

参謀本部 影佐禎昭を中心として，汪兆銘政権成立のため上海を拠点として活動した謀略機関で，別名を「梅機関」と呼ばれたのは本拠地「梅華堂」の頭文字をとったものである。上海は中国随一の巨大国際都市で，当時から諸外国が統治する租界が存在し，各国による国際的な諜報活動が展開され，謀略拠点とする利点があった。

影佐機関は，もとは，参謀本部 土肥原賢二が上海で旧軍閥 呉佩孚らによる傀儡政府を成立させようと工作を行っていた特務機関，土肥原機関（別名「重光堂」）が失敗し，その残務処理を引き継いだものであった。1938年末に汪兆銘を重慶政府から脱出させ，政権成立工作の仕上げのため，政府直轄機関として上海に梅機関が開設されたのは1939（昭和14）年8月だった⁽⁸⁾。



第10図 昭和15年当時の影佐機関員ら
 (出典:塚本誠『或る情報将校の記録』口絵, 塚本英史氏提供)
 梅華堂とは梅機関のことであり，影佐機関を指す。

第3表 影佐機関（梅機関）の主な構成員

(筆者作成，参考：影佐禎昭「曾走路我記」，『周仏海日記』，浅田百合子『日中の架け橋 ～影佐禎昭の生涯～』，「汪清衛関係 第三巻」〔矢野記録〕2. 汪精鋭工作備忘録（外務省外交史料館所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref. B02031744800），『戦史叢書 支那事変陸軍作戦<3>』)

陸軍 (参謀本部)	機関長：影佐禎昭少将，石原幸次少佐（影佐の副官），川本芳太郎大佐，谷萩那華雄大佐，大村主計少佐，堀場一雄中佐（のち桐工作*に関与） 土肥原機関から特務工作を引き継いだメンバー：晴気慶胤中佐，塚本誠少佐 *水面下で，直接，重慶の蒋介石政権との和平工作を行おうとした工作
海軍	須賀彦次郎大佐，扇一登少佐
外務省	矢野征記書記官，清水董三書記官
民間	犬養健衆議院議員
興亜院*官僚	*日中戦争の拡大に対応し，対中政策の統一を図るために内閣に設置された機関
新聞関係者	松本重治（同盟通信），神尾茂，太田宇之助（ともに朝日新聞）

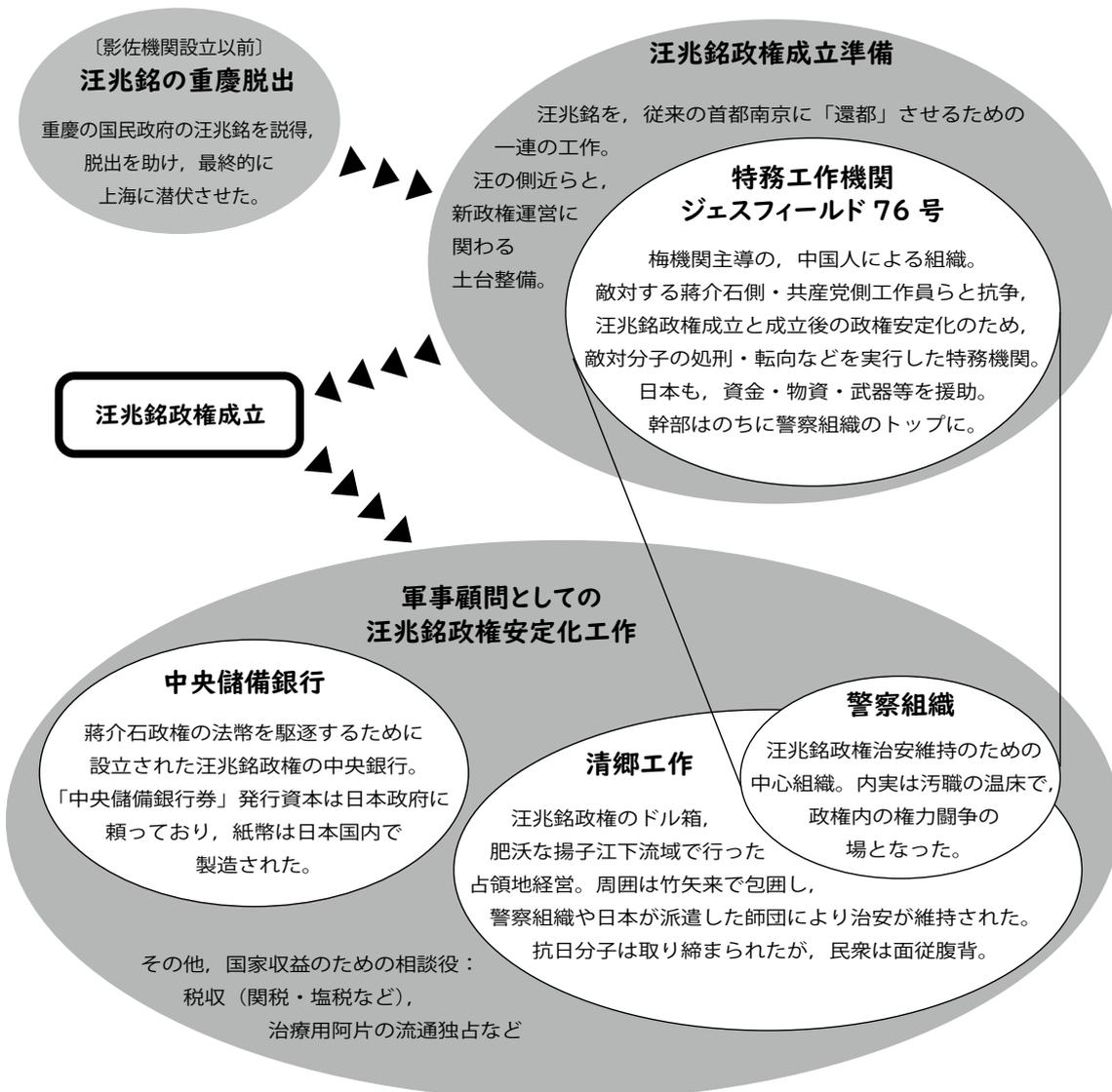
梅機関の汪兆銘に対する方針： ①密接なる連絡 ②絶対的の不干渉 ③徹底的援助⁽⁹⁾

汪兆銘政権が成立した後は、影佐を最高顧問とした軍事顧問団を形成し、汪兆銘政権の地盤固めと勢力拡大のため、多方面にわたり工作を行った。

③ 影佐機関が行った謀略

影佐が行った初期の謀略は、参謀本部第二部第八課（謀略課）の設立と、影佐の初代課長就任まで遡る。参謀本部第二部第八課は、1937（昭和12）年11月、日中全面戦争の早期解決を図るため必要に迫られて設置された。しかし、本丸である蒋介石政権との交渉は日本が思うようには進まず、日本政府は1938（昭和13）年1月「爾後、国民政府を^{じこ}対手とせず」と蒋介石政権の否認を宣言した第一次近衛声明を^{あいて}発した。これにより蒋介石政権との交渉は表向き不可能となった。そこで影佐は、蒋介石政権内にいた汪兆銘を和平交渉の相手として担ぎ出すため、汪兆銘政権を樹立させようと画策する。汪政権成立後は、影佐は政権安定化を目指した。

影佐が展開した主な謀略は第11図のとおり。



第11図 影佐機関が展開した対中国謀略（筆者作成）

④ 『周仏海日記』から読み解く汪兆銘政権と影佐機関

日本の参謀本部の謀略を検証するうえで、今回は『周仏海日記』（みすず書房、1992年）を取り上げる。

汪兆銘の側近で、汪政権の実質ナンバー2として財政部長、警政部長などを務めた周仏海（1897-1948）は、1937（昭和12）年7月1日か



第12図 周仏海

（出典：『写真週報』110号 昭和15年4月3日号）

1897年湖南省生。京都帝大留学時代は中国共産党にも接触。帰国後は中国国民党に参加。重慶脱出後、汪兆銘政権内の権力者に。戦後は「漢奸（売国奴）」として捕えられ、1948年に獄死。

ら1945（昭和20）年6月9日まで、ほぼ毎日日記を綴っていた。周は、中国国民党幹部であった時に汪兆銘と共に重慶を脱出、以来、影佐機関員らとも深く交わった。したがって、彼の日記からは、傀儡政権の「カネ」と「警察権力」を握った人物の目を通した、汪政権の始まりから終焉間際までの実態を読み取れる。残念なことに、影佐機関による汪政権成立工作が始まった1939年の日記は所在不明であるため、その年に展開された初期工作の記録はない。しかし1940年以降は、汪政権成立までの「梅機関員」との日常的な接触や、汪政権の中央銀行であった「中央儲備銀行」の設立とその内実などが当事者の視点から書かれている。

周の次男 周幼海による「周仏海日記について」（『周仏海日記』所収）には、周は自身の「高潔さ」をひけらかすために日記を記していたとあり、事実もあれば意図的に隠されたことからもあろう。だが、この日記は、当時の影佐機関の働きや傀儡政権の空疎な実態を伝える貴重な記録である。

1) 汪兆銘政権成立以前の工作① 「梅機関」以前の工作

1937年、第二次上海事変のさなか、蒋介石の国民政府の中にも日本との和平を積極的に探るグループが存在していた。周仏海もそのメンバーだったが、当時は蒋介石の党・政府・軍の権力の支配機構である「侍従室」の一員だった⁽¹⁰⁾。周は、その立場にあって、まずは戦争状態を終結し、その後外交で決着させることを、当時の国民政府のナンバー2であった汪兆銘を通じ蒋介石に提案している。

周仏海日記		※〔〕内は筆者補足（以降同じ）
1937年 8月30日	…〔陶〕希聖* ¹ と伴に汪先生のところに行き、戦時は適当な時点で切り上げ、目下は外交を開始すべきとの理由を力説し、…汪先生は蔣先生を極力説得することを承知された。帰宅後、適之* ² 、〔高〕宗武* ³ と共に対日外交の段取り及び要点など具体策を検討し、宗武が起草することになった。…希聖と内容を検討し、若干手を加える。	
	*1 当時、北京大学教授。重慶を脱出した汪兆銘、周仏海とともに昆明からハノイへ脱出。 *2 胡適。当時、北京大学文学院院长。 *3 当時、国民政府外交官。日本との秘密交渉の窓口となった。翌年2月に「日本問題研究所」という情報機関を設置、日本の民間エージェントと接触、6月に影佐らに面会する ⁽¹¹⁾ 。	
同年 8月31日	…我々の提案した外交進行方式は蔣先生に採用されなかった…	

だがこの提案は、蔣介石政権側にとって全面戦争終結のための日本の要求が高く、激しさを増していた抗日運動を背景に受け入れがたいものであり、蔣に却下された。それでもなお、周らは一刻も早い戦争の終結を望み、蔣介石との意見の対立は続いていた。

周仏海日記	
1937年 10月3日	…余は、一日でも早く和平することが中国にとってより多くの利益をもたらすとして、直ちに米、独に調停依頼を要請すべきことを主張…

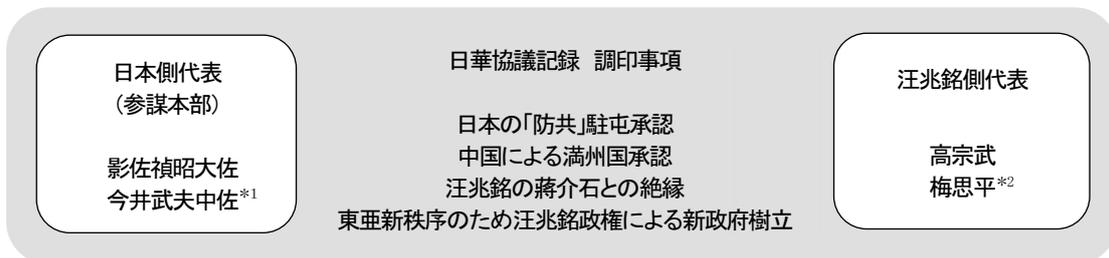
1938（昭和13）年1月の「国民政府を^{あいて}対手とせず」とした近衛声明が象徴するように、日本は強硬姿勢のまま日中全面戦争を展開する。とはいえ、日本にとっても日中全面戦争の長期化は望ましくなかった。

その直後、事態が動く。同年6月、周仏海らと行動をともししていた和平派の高宗武^{こうそうぶ}らが、影佐と接触する。日本側（影佐）と彼らのような蔣介石政権内の和平論者とは戦争の長期化を避けたい思惑が合致したのである。影佐は「対手とせず」とした蔣介石と和平交渉は行わない代わりに、交渉相手として傀儡政権を打ち立てる必要があったのである。

こうして、日本が利権を手放すことなく戦争を終結させるための謀略の構想が固まっていた。

2) 汪兆銘政権成立以前の工作② 重光堂会談と汪兆銘の重慶脱出

首都南京が日本によって陥落した後、蔣介石の国民政府は重慶に移転した（重慶政府）。汪兆銘が日本とともに政権を成立させるには、重慶から脱出する必要があった。この計画の1938年11月20日、上海の「重光堂」（土肥原機関）で汪兆銘側代表の高宗武・梅思平^{ばいしへい}と、日本側の影佐らで会見を行った（「重光堂会談」）。この際に「日華協議記録」⁽¹²⁾が調印され、この中で「日支新関係調整方針」について日本政府と汪兆銘が互いに同意した場合に汪兆銘は重慶を脱出することが決定された。



* 1 当時、参謀本部第二部第七課（支那課）支那班長。のちの対重慶和平工作である「桐工作」の中心人物のひとり。

* 2 当時、国民政府大本営第二部（政略）秘書。高宗武の肺病治療のため日本との秘密交渉窓口を引き継いだ⁽¹³⁾。

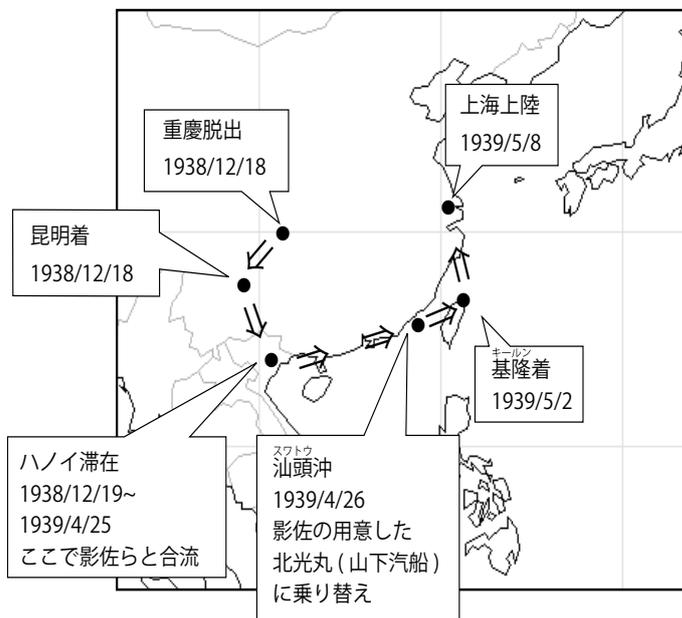
第13図 重光堂会談 1938年11月20日、於上海・重光堂（土肥原機関）（身分は当時）

周仏海日記	
1938年 11月21日	…関わっている事*に幾分か目鼻がついたが、変化があるかどうかは予想できない。… * 重光堂会談で日本側の条件を受け入れ、汪兆銘らが重慶を離脱し、汪政権を成立させ、汪兆銘が蔣介石にとって代わり日中の「和平」を実現すること。

『周仏海日記』によれば、高宗武は周仏海と重光堂会談の直前に頻りに会っており、周もこの交渉における汪兆銘グループ側の方針を定めるのに関わっていたことが示唆される。その約1ヵ月後、汪兆銘は重慶を脱出、12月18日に昆明^{クンミン}で周仏海、陶希聖^{とうきせい}と合流し、翌日にフランス領インドシナ（現・ベトナム）のハノイへ向け出国する。

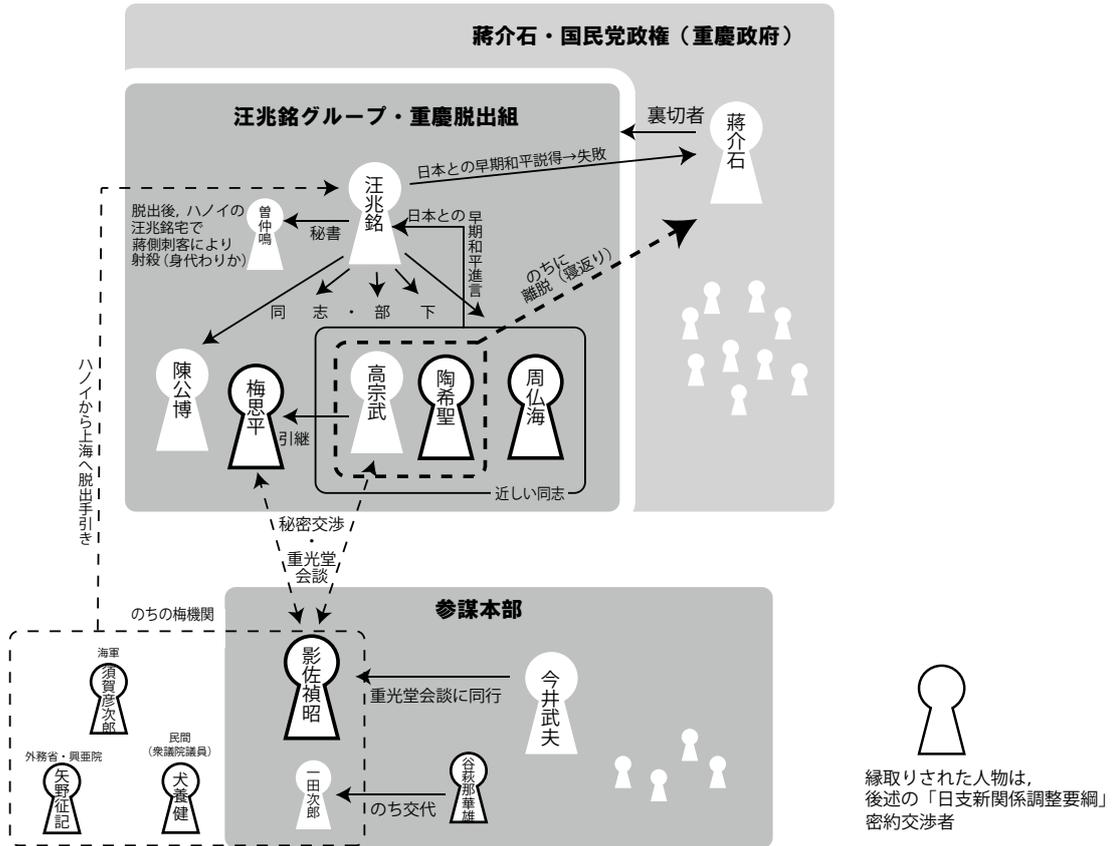
周仏海日記	
1938年 12月19日	…九時に戻ると、〔陶〕希聖がすでに来ており、一緒に汪先生を拝謁し、午後二時にハノイ行の飛行機をチャーターできるとのこと。飛行機なら早い危険が伴う。列車だと安全だが二日は待たねばならぬ。…結局冒険でも飛行機に乗ることに決めた。そこで希兄〔陶希聖〕とそれぞれ宿舎に戻り、旅装を整えた。…三時十五分に離陸する。…一時間ほどでベトナム領〔ママ〕に入り、安全になったことを知る。五時半に〔ハノイに〕到着する。…これで現状を脱したのである。

その後の、ハノイでは秘書の曾仲鳴^{そうちゆうめい}が身代わりとして射殺されるなど、汪兆銘にとって命の危険があった。汪をハノイから安全に脱出させるため、1939（昭和14）年4月、日本側から影佐、犬養などの梅機関員となるメンバーが派遣された。5月には、日本が汪を保護することができる、共同租界のある上海へと移動した。そこで梅機関を発足させ、汪兆銘政権を成立させるための謀略活動を開始した。



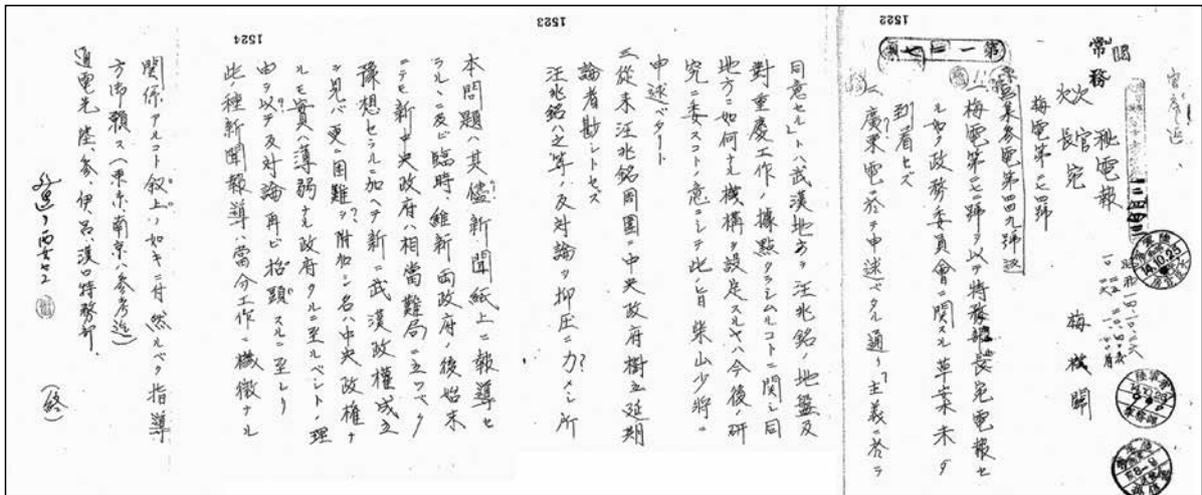
第14図 汪兆銘の重慶脱出から上海入りまでのルート
 (筆者作成、参考：『周仏海日記』、『戦史叢書 支那事変陸軍作戦<2>』、影佐禎昭「曾走路我記」、犬養健『揚子江は今日も流れている』白地図出典：© craftmap.box-i.net)

なお、梅機関設立前の状況を人物相関図として整理すると第15図のとおり。



第 15 図 梅機関設立前の汪兆銘グループ周辺人物相関図

（筆者作成，参考：『周仏海日記』，「汪清衛関係 第三巻」〔矢野記録〕2．汪精鋭工作備忘録（外務省外交史料館所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref.B02031744800）ほか）



第 16 図 汪兆銘政権成立前の工作の状況について，梅機関から参謀本部宛てに送られた秘電報

「昭和 14 年 10 月 26 日新中央政府樹立運動に関する件」（防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref.C04121519700）

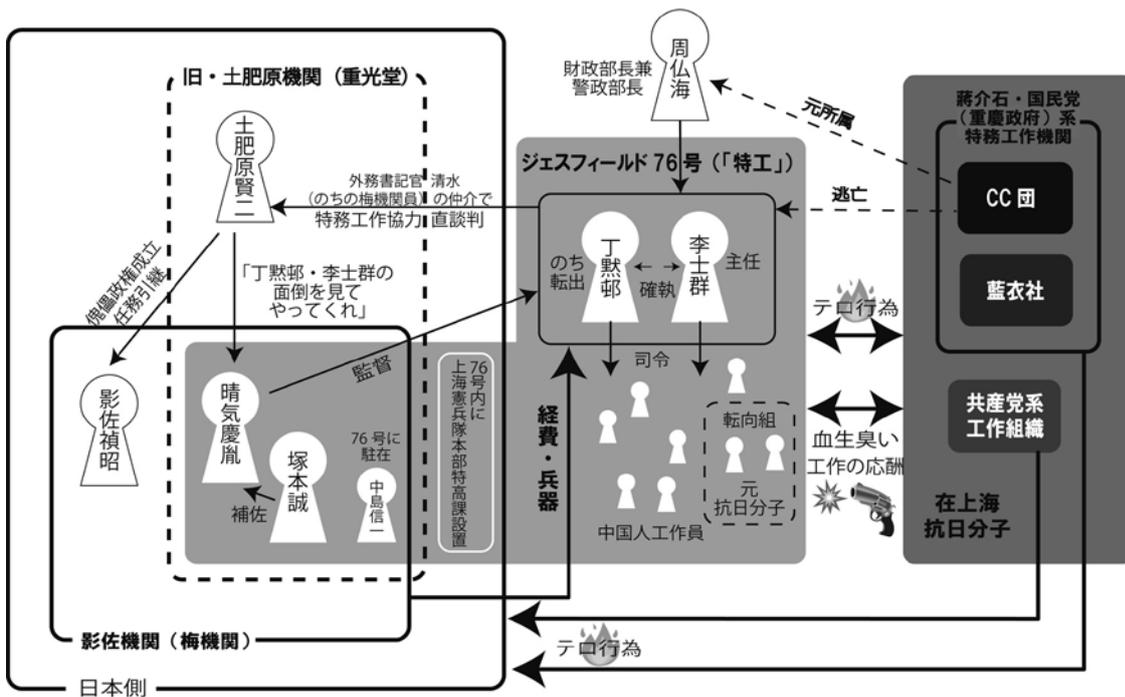
「梅機関」から陸軍省，参謀本部や在中国特務機関などへ工作に関する状況を伝えている。

3) 「梅機関」による主な工作① 特務工作機関「ジェスフィールド76号」

1939年3月、梅機関は政権の安定化を図るための特務工作機関「ジェスフィールド76号」を上海に設置した。機関名は上海のジェスフィールド通りの住所に由来し、存在は秘匿された。上海では重慶政府から離反した汪一派への反感も大きく、頻発する抗日テロに対してテロ行為で対抗した。具体的には、敵対する工作員を転向させ味方に引き入れ、敵のノウハウを入手、相手の転向が見込まれない場合は処刑するなどした。だがこのテロ合戦は一般市民からも「泣く子もだまる76号」と嫌悪される一因にもなった。

この工作機関の資金・武器は日本から提供されていた。このことは、1. - (2) で触れた登戸研究所の規模拡大に伴繁雄の上海出張（爆破・殺傷用謀略兵器実演）とも関係する。

汪政権成立後は「特工総部」（別名「特工」）という正式機関となり、この組織の主任が、後述する「清郷工作」の現場責任者となったことから政権内の権力争いの激化と腐敗が進んだ。



第17図 「ジェスフィールド76号」関係者相関図
 (筆者作成、参考：晴気慶胤『謀略の上海』、塚本誠『或る情報将校の記録』ほか)

周仏海日記	
1940年 1月12日	…晴気及び塚本が来て、特工拡大計画を陳述し…必需経費の拡大を求める。このために財源を準備する必要があり、一番良いのが阿片税で充当することである。ただ特工人員が特税を行うのは好ましくはなく、一つには腐敗の恐れ、一つには実力と財力のいずれも特工人員が握ることになると将来権力が増大し操縦が難しくなるので、余が別に幹部を組織して処理することを望む。… [注・結局は別組織にならなかった。]
1941年 5月25日	[丁] 黙邨、[李] 士群の摩擦は…ますます激化…いずれも職務の去就を以てどちらも影佐の支持を取りつけようとしており、影佐も対応に苦慮しているとのこと。…

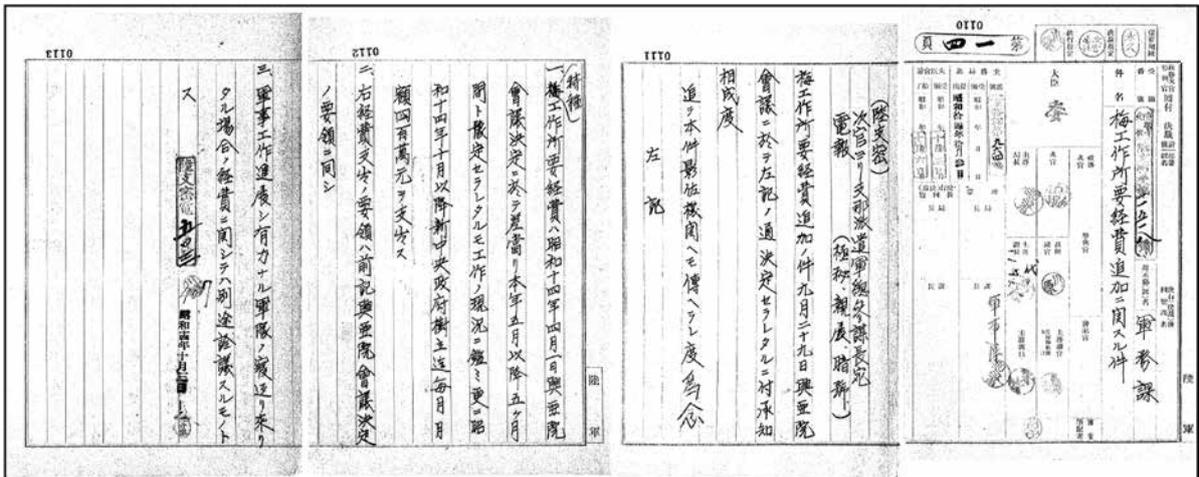
特務工作機関「ジェスフィールド76号」に関する資料

三、調査統計部 汪逸波部處
 地 址 板恩非安路七六號（電話二二一八一二）
 右ハ其ノ組織極秘ニシテ公開シアラザル爲調査不可能ナリ

第18図 ジェスフィールド76号が「極秘」組織であったことを示す資料
 （上海市政研究会『昭和17年9月30日上海共同租界内行政権に関する諮問事項答申書添附調査報告書（其ノ一）』より、狛江市教育委員会所蔵）
 2行目、「板恩非安路七六號」で「ジェスフィールドロード76号」と読む。「右は其の組織極秘にして公開しあらざる為調査不可能なり」。



第19図 昭和14年当時のジェスフィールド76号関係者の集合写真
 （出典：塚本誠『或る情報将校の記録』口絵、塚本英史氏提供）
 前列左から、川本（芳太郎）大佐、李士群、丁黙邨、影佐（禎昭）少将。後列左から、塚本（誠、少佐）、晴氣（慶胤）少佐。



第20図 「昭和14年10月3日 梅工作所要経費追加に関する件」
 （防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref.C04121431800。）
 「梅工作」の「特種」工作所要経費として新中央政府（汪兆銘政権）樹立まで月額400万円（現在の日本円の価値で約40億円）の支給が興亜院會議で決定された。

<p>2800</p> <table border="1"> <tr> <th>買名</th> <th>姓</th> <th>内稱</th> <th>放人</th> <th>性</th> <th>別</th> <th>計</th> <th>拘留月日</th> <th>解放月日</th> <th>備考</th> </tr> <tr> <td>王水發</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>男</td> <td>男</td> <td>九名</td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>王</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> </table>		買名	姓	内稱	放人	性	別	計	拘留月日	解放月日	備考	王水發	王	王	王	男	男	九名	十二月廿八日	十二月廿九日	右	王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	<p>13 9800</p> <table border="1"> <tr> <th>周者</th> <th>姓</th> <th>内稱</th> <th>放人</th> <th>性</th> <th>別</th> <th>計</th> <th>拘留月日</th> <th>解放月日</th> <th>備考</th> </tr> <tr> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>男</td> <td>男</td> <td>十五名</td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> <tr> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>周</td> <td>男</td> <td>男</td> <td></td> <td>十二月廿八日</td> <td>十二月廿九日</td> <td>右</td> </tr> </table>		周者	姓	内稱	放人	性	別	計	拘留月日	解放月日	備考	周	周	周	周	男	男	十五名	十二月廿八日	十二月廿九日	右	周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右	周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右
買名	姓	内稱	放人	性	別	計	拘留月日	解放月日	備考																																																																																																																																																																																																																						
王水發	王	王	王	男	男	九名	十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
王	王	王	王	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
周者	姓	内稱	放人	性	別	計	拘留月日	解放月日	備考																																																																																																																																																																																																																						
周	周	周	周	男	男	十五名	十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						
周	周	周	周	男	男		十二月廿八日	十二月廿九日	右																																																																																																																																																																																																																						

第21図「昭和15年2月13日 特務工作関係書類提出(送付)の件(1)」表紙, 18, 19頁

(防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref.C04121869900。)

影佐が阿南陸軍次官に宛てた抗日敵性分子処分の「第13次」報告。1939(昭和14)年12月1日-31日の丁黙邨らによる特務工作として「死刑執行犯人」が合計9人であったとある。

4) 「梅機関」による主な工作② 「日支新関係調整要綱」合意の密約

1939年の『周仏海日記』は所在不明であり、梅機関と汪グループがはじめて接触した時期や梅機関の活動の経過がわかる日々について、その当時に記された記録は残っていない。そのため、梅機関長としての影佐と梅機関員が日記にはじめて登場するのは汪兆銘政権成立約2か月前の1940年1月2日である。

周仏海日記	
1940年 1月2日	<p>…午後、汪先生のお供をして影佐を接見し、日本当局と汪先生との間で連合宣言を発表するか、あるいは同時にそれぞれ発表し、互いに呼応する形をとるかどうかが協議する*。…またわが方はその時に日本が要人を上海に派遣してくれるよう要望するが、影佐は東京と連絡を取って協議するよう努めると述べる。…</p> <p>* 汪兆銘側と梅機関が秘かに前年12月30日に合意した「日支新関係調整要綱」に基づくもので、この要綱は7回の公式協議会と非公式会議を経て決定。協議会は汪側からは周仏海、梅思平、陶希聖、周隆庠、(5回目以降より)林柏生が出席。梅機関側からは影佐、谷萩(陸軍)、須賀、扇(海軍)、矢野、清水(外務省)、犬養(衆議院議員)ら6~9名が毎回出席した⁽¹⁴⁾。</p>

この日に先立つ1939年12月30日、汪兆銘グループの幹部と梅機関の密談により「日支新関係調整要綱」⁽¹⁵⁾が合意に至り、汪兆銘政権を日本の傀儡政権として成立させたうえで、汪政権を正式に中国政府を代表する交渉相手とする方針が定まった。しかし、これは中国にとり一層不利なものであったため、この密約交渉の汪政権側当事者のひとりであった陶希聖と、早い時期から影佐と接触していた高宗武の二人が一転、汪兆銘グループから離脱、日本側からの過酷な条件を批判し、1940年1月下旬、交渉の内実を香港のメディアに暴露した。

「日支新関係調整要綱」の中身

中国による満州国の承認
 防共地帯（華北）における日本軍の駐屯地域での日本によるインフラ監督権留保
 華北・満蒙資源の共同開発にかかる日本への便宜供与
 汪兆銘政権の中央銀行設立・新通貨発行などへの日本側からの援助
 汪兆銘政権への日本人顧問の招致、採用
 事変中における中国本土での日本国民が被った損害補償（賠償）の要求 など

5) 汪兆銘政権の成立と「軍事顧問」としての活動の継続

1940年3月30日、汪兆銘政権が南京で成立した。使命を達成したと同時に梅機関は上海を引き払った。そして「還都」した南京へ移転し、「国民政府〔＝汪兆銘政府〕最高軍事顧問部」として活動を継続した。梅機関員であった者のうち、影佐は政権の「最高軍事顧問」となり、同じく「軍事顧問」となった谷萩、晴気、塚本とともに引き続き謀略を進めた。

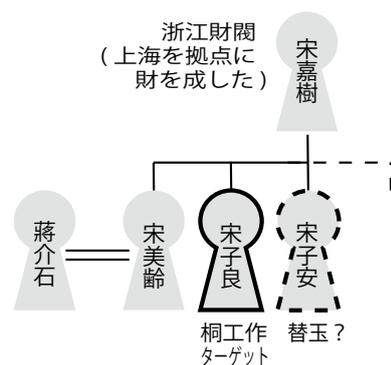
6) 桐工作への協力

汪政権工作と並行して、水面下では、日本政府が「対手とせず」と声明を発したはずの蒋介石の重慶政府側とも直接交渉が行われていた。

影佐とともに1938年の重光堂会談を行った今井武夫（桐工作実行時は支那派遣軍総司令部第二課長兼第四課長）と、参謀本部第二部第八課長（謀略課長）白井茂樹（影佐の元部下）らが、汪政権成立に前後する1940年春頃から、蒋介石の義弟 宋子良（と思しき人物）に対し重慶政府との直接和平を目指す「桐工作」を行っており、梅機関も協力

した。日本側はこの工作で支那派遣軍総参謀長 板垣征四郎と蒋介石とを秘密裏に直接会談をさせ、戦争の終結を期待していた。それを達成できたならば、蔣政権に代わる相手、すなわち汪政権は不要となる。したがって、桐工作の失敗が確定するまで、日本は汪政権の承認を引き延ばしそうとした⁽¹⁶⁾。

『周仏海日記』には、重慶政府に意図を見透かされた日本が、期待を持たされつつ、できるだけ交渉を先延ばしにされ、翻弄される様子が記録されている。



第22図 蒋介石と宋子良の関係
 (筆者作成)

周仏海日記	※ゴシック体での強調は筆者による（以降同じ）
1940年 3月25日	…影佐が来て、重慶に対する工作及び将来の全般的趨勢 ^{すうせい} について話し合う。…
同年 6月14日	…晩、今井大佐と対重慶工作について話し、三回にわたって香港で宋子良と交渉した経過を詳しく聞く。この事について余は最初から実現しそうにないと判っていたが、…彼も以前より自信を失ったようであった。宋らの行動が蔣の命令あるいは同意を得たものなのかどうか疑問であるが、…大まかに言えば和平は〔蔣の〕その意とするところになく、これでもってわが政府を破壊したいというのが実際の気持ちであろう。そこで今井に、日本側が注意するよう告げる。…
同年 8月20日	…余は宋子良の真偽を問い質すと、彼〔臼井〕はおそらく宋子安〔子良の実弟〕が交渉に出ているのだろうと言う*。数ヵ月にもなる相手の真偽がまだ定かでないとは、まったくお笑い草なり。… * 替え玉とされる人物には諸説あり。
同年 11月23日	…この一年来、日本側の中国情勢についての認識の不正確なこと、情報も常に誤っていることを深く思わざるを得ない。…
同年 11月24日	…松岡〔洋右、当時 外相〕は、…もし重慶側がはっきりと和平すると表明したなら、直ちに汪先生と調印〔≡汪兆銘政権承認〕延期を協議するという。余はもし本当にそうであるなら、…おそらくそれは重慶の引き延ばしの術に嵌まるだけであろう、と言った。
同年 11月28日	…犬養からは東京は三十日調印を確定した、との電話があり、これで重慶和平の説が事実でないことが証明されたといえよう。…

⑤ 清郷工作⁽¹⁷⁾

汪兆銘政権成立後、その勢力圏の治安維持・経営のための謀略が「清郷工作」である。

汪政権の勢力範囲は上海・南京など限定的であったが、その周辺の肥沃な揚子江河口域南岸地域は税収のドル箱と言え、汪政権は「完全な自主独立の基盤」として「清郷工作」を展開しようとした。しかしこのあたりは中国国内でも特に裕福な地域で有力な浙江財閥など蔣介石支持層の地盤であり、また共産党も農村を中心に勢力を伸ばしていた敵性地区でもあったため抗日感情が特に強い地域だった。当然、そこでも汪政権に対する人民からの信用は低く、汪政権、国民党系軍、共産党系軍（新四軍）との三つ巴で激しく争った。そのため、もともと財政難の汪政権は経済的にも軍事的にも日本に頼らざるを得ず、実態は日本による占領地経営であった。

しかし実体のない汪政権にとって支配地経営は悲願であり、この工作に大きな期待をかけた。『周仏海日記』には、政権の中心とも言えるこの工作への、元梅機関員をはじめとした多くの日本人による関与や、その困難であった様子が書き留められている。

清郷工作大綱（要旨）

- ・ 民衆に基礎を置く自立体制確立のための日華協力と汪政府の強化
- ・ 工作に専念できる特殊な清郷機構（＝清郷委員会）による政治建設と中国人による自力維持
 - ・ 汪主席直接指導による清郷委員会の設置と現地工作責任者（秘書長）の任命
- ・ 敵性武装団体、組織の総力戦的討伐と妨害防止のための工作地域の封鎖（竹矢来の建設）、
 - 日本軍による敵の集団武力討伐と封鎖戦の維持防衛
- ・ 敵〔反汪政権、抗日勢力〕を掃討後の民衆による自衛と警察による治安維持
 - ・ 民衆生活の向上を至上目的とした強力な保護経済政策による民心の把握

→ 理念は素晴らしいものに見えるが、民衆の抗日感情や汪政権の財政難を鑑みると到底実現可能なものではなかった

周仏海日記	
1941年 4月11日	…晴氣中佐が清郷問題で来訪。…午後、谷萩大佐が来訪*し、国民政府の強化法について軍事、外交、政治、金融のそれぞれの角度から提案するが、採用すべき点が多い。… * 晴氣中佐も谷萩大佐も元梅機関員。特に晴氣は清郷工作の日本側現場責任者。
同年 5月8日	…〔李〕士群が清郷委員会の工作を報告に来たので、一つ一つ指示を与えた。人事と経費に特に注意を促した。…岡田〔西次〕大佐〔当時 汪政権経済兼軍事顧問〕が清郷の経費問題を相談に来たので、政府の財政は困難であり、…いつかは破産してしまうと述べた。…

この工作では日本による派遣師団や、汪兆銘が直接指導した「清郷委員会」が治安維持に努め抗日分子を取り締まったが、人民は面従腹背という状況であった。

また汪兆銘が直接任命した現場責任者は上海の元「特工総部」主任 李士群であり、政権中央から独立した場所での汪兆銘直接指導という名目のもと、李は、汪政権中央幹部（特に周仏海）との確執を招いた。こうして「清郷工作」は政権の基盤を揺るがすこととなる。

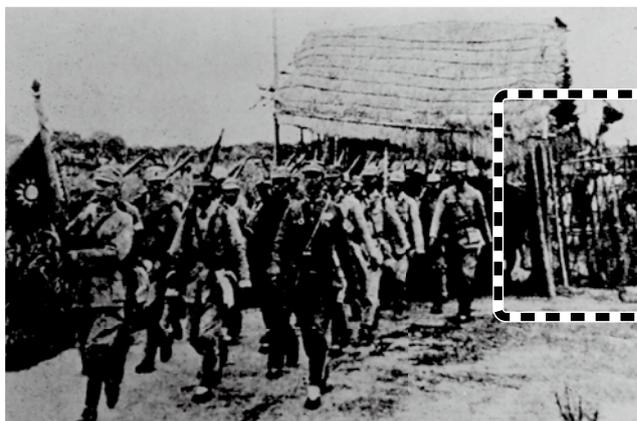
清郷工作概要

実施時期：1941年7月～1943年春頃（自然消滅） 汪兆銘が直接選任
 主な対象地域：揚子江南岸地区 ↓
 責任者：（汪政権側）清郷委員会秘書長（李士群、元特工総部主任）
 （日本側）第十三軍（別名「登」部隊）参謀長
 現場責任者：晴氣慶胤中佐、中島信一中尉
 （ともに元梅機関員、従来より李士群の監督係）
 治安担当：清郷委員会（汪兆銘直属）、第十三軍司令部（日本陸軍）
 特徴：周囲を「竹矢来」で囲い込み、敵性組織の掃討と人民支配を行う
 竹矢来総延長：1700km（使用した竹の本数は第I期130km分だけで約200万本）
 敵性勢力：忠義旧国軍（重慶側遊撃隊）、新四軍第六師（中国共産党軍）ほか



第23図 李士群
 （出典：『最新支那要人伝』）

周仏海日記	
1941年 7月31日	…彼〔影佐〕が言うには、〔清郷工作をやらせている〕李士群〔清郷委員会秘書長〕の禍は大である。…〔注・周仏海の嫉妬からくる記述である可能性あり〕
同年 8月3日	…〔李士群に対する〕汪先生の臆病と日本側の庇護がその傲慢ぶりを助長した主な原因である。今、日本側は判ってきたようだが、汪先生は依然として恐がっている。これでは権威を維持できない…



第24図 「清郷工作 清郷地区に活躍する保安隊と竹矢来」

（出典：『戦史叢書 支那事変陸軍作戦<3>』口絵）
 日本国内では清郷工作は成功していると喧伝されていた。竹矢来は中段右端（点線枠内、筆者追加）に見える。

⑥ 中央儲備銀行の設立

汪兆銘政権は独自の通貨「中央儲備銀行券」(儲備券)を発行する「中央儲備銀行」を設立した。梅機関員らが全面的に支える中、汪政権の財政部長 周仏海(のちに中央儲備銀行総裁)を中心に計画を進め、日本は多額の出資に加え、儲備券自体を日本国内の内閣印刷局(現 国立印刷局)や凸版印刷で製造した⁽¹⁸⁾。



第 27 図 「儲備券用紙〔綴〕」背表紙(当館所蔵)

戦後、日本国内で発見された。綴の実際の中身は偽造法幣用紙の試抄紙と思われる。

なお、「儲備銀行」という名称は、蔣介石が 1937 年に設立予定だった中央銀行の名称として考えられていたものだった。

ここでは、日本の資金調達や紙幣印刷を裏付ける記述を『周仏海日記』から紹介する。

周仏海日記	
1940 年 5 月 3 日	…午後、中央銀行準備委員会〔主席 周仏海〕第一回会議を招集し、「中央儲備銀行」と名付け、双十節〔10 月 10 日〕に正式に成立させること*を決定する。… * 中央儲備銀行は実際には翌年 1 月に業務を開始する。
同年 5 月 20 日	…犬養〔健〕*が来て、…東京で中央銀行の資金調達と紙幣印刷の件を進めてもらうよう頼み… * 元梅機関員で、当時は汪政権経済顧問。
同年 7 月 1 日	…影佐、犬養、安藤〔明道〕、久保〔文蔵〕*らに来てもらい、法幣〔ここでは儲備銀行券を指す〕を製造するうえの各種措置を合同で協議し、図案及び数量を決定し、日本内閣印刷局に印刷の代行を委託することにする。… * 安藤と久保は、当時それぞれ、興亜院経済第三局長と同經濟部第四課長で、中央儲備銀行設立に奔走した。
同年 11 月 20 日	…午後、日銀に行き、総裁の結城〔豊太郎〕氏を訪問する。…結城は、日本銀行と中央〔儲備〕銀行の間の密接な協力が必要であり、彼も出来る限りの援助をすることを表明した。…その後、内閣印刷局を参観し、中央〔儲備〕銀行の新紙幣印刷のため努力をしているのを目にして大いに感激する。…この印刷局は規模も大きく、仕事もとても複雑であった。…
同年 12 月 17 日	行政院会議に出席し、貨幣整理暫行辦法 ^{べんぽう} ⁽¹⁹⁾ 採択と中央銀行正副総裁及び理幹事の承認を行う。安藤と久保が中央銀行成立に関する中日協力の覚書を携えてやって来る。日高〔信六郎〕*と余が調印する。…一月六日に中央〔儲備〕銀行は正式に業務を開始することを決定した。… * もと興亜院経済部長、当時、南京駐在大使館参事官に転任。

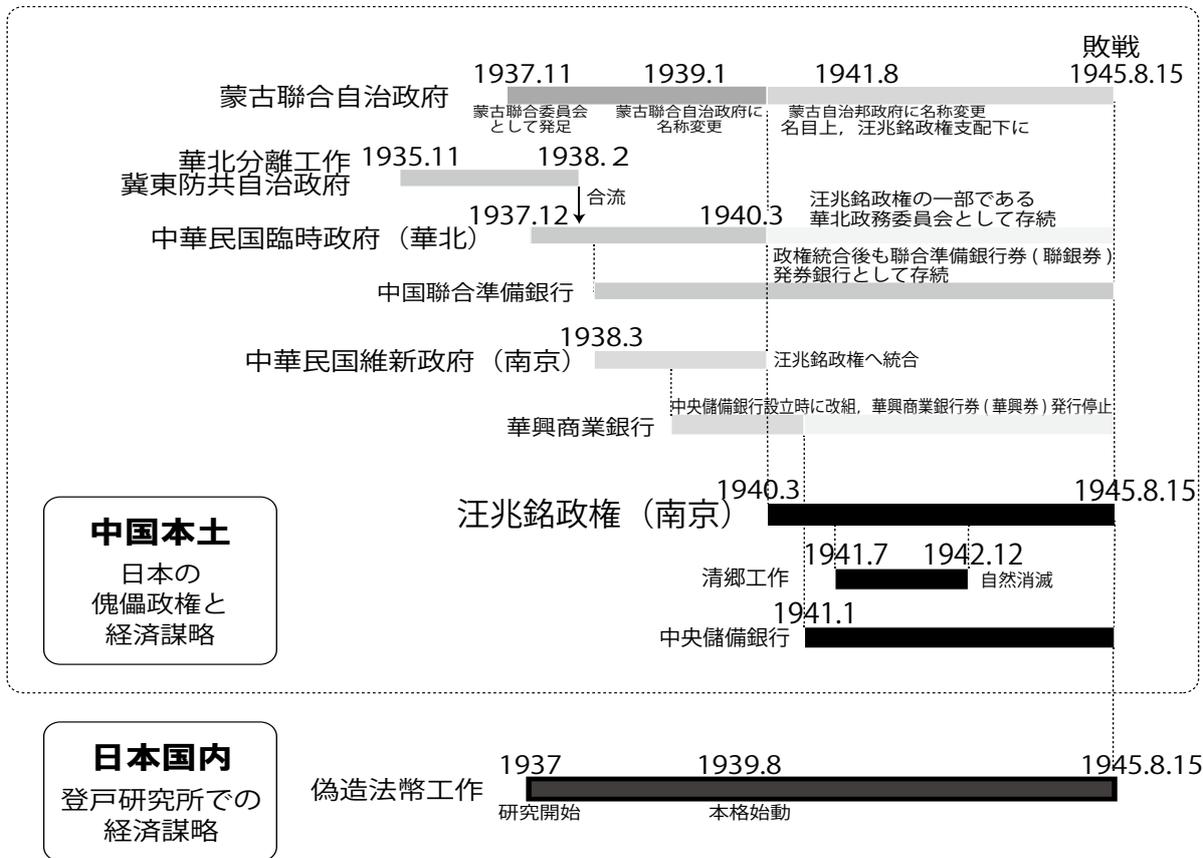
3. 謀略最後の切り札 - 偽札工作

清郷工作の自然消滅、儲備券の価値下落といった経済面の理由により、日本が期待をかけた傀儡の汪兆銘政権の権威はますます失墜した。ここでは、そうした背景の中で、登戸研究所の偽造法幣が最終兵器となっていった様子を見ていく。

(1) 参謀本部による経済謀略の失速

第 28 図のとおり、参謀本部は汪兆銘政権成立以降、中国本土での対中国謀略はこの政権に

政治・経済謀略の全てを集約し、戦争早期終結の全ての望みを賭けていた。したがって、汪政権を使った謀略が奏功しない場合、蒋介石政権の法幣弱体化のための対中国謀略は登戸研究所製造の偽札が切り札となることがわかる。



第28図 中国本土及び日本国内で日本陸軍が行った経済謀略とその時期（筆者作成）

① 傀儡政権の失敗

1936(昭和11)年頃からの戦時インフレにより、日本円の価値は下落し戦費調達は困難に陥っていた。そうした中で戦時に傀儡政権を成立させることには次の利点があった。

- ・ 占領地経営による収益増
- ・ 独自通貨の発行・流通による日本主導の経済圏形成、戦費調達の安定化
- ・ 占領地での通貨統制による蒋介石政権の法幣駆逐と弱体化

日本が中国に複数の傀儡政権を樹立し、それを汪政権に集約した一連の流れは、対中国謀略としては理に適っていたと言える。しかし、日本の傀儡政権をほぼ統合した汪政権での工作を総括すると、占領地経営としての清郷工作は**失敗**、独自通貨としての中央儲備銀行券は普及しないどころか**価値が下落**し、通貨統制は法幣の信用度の高さから**逆効果**、と、いずれも失敗に終わっている。

② 経済面から見た汪兆銘政権の中身

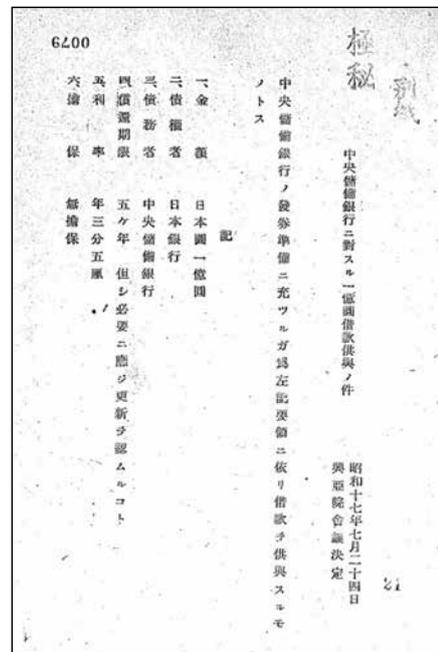
実体の無い政権維持のための資金捻出は困難であり、戦局の悪化とともに、汪政権の財政はますます困窮していった。汪政権の財政部長であり中央儲備銀行総裁であった『周仏海日記』を再び取り上げながら政権の実態を見ていく。

1) 赤字財政

汪政権は、そもそも経営自体が日本の支援がなくては成り立たず、当初より、日本からの借款を繰り返していた。主な収入は「関税」,「塩税」,「統税」⁽²⁰⁾で、華北からの税収も中央に融通していた。しかし、財政は毎月大幅な赤字が続いた。周仏海は財政部長として、当初は、アヘンに特税を科すことで不足を補うことも考えていた。

第4表 汪政権の赤字財政
 (『周仏海日記』1941年12月31日注記より)
 1942年度1月収支 (単位: 万元)

	予算	実収入	決算額
関税	2015	250	-1765
統税	1214	200	-1014
その他	1130	351	-779
塩税	200	228	28
合計	4559	1029	-3530



第29図 「中央儲備銀行に対する1億円借款供与の件」
 (部分, 防衛研究所戦史研究センター所蔵/
 アジア歴史資料センター公開 Ref.C04123657700)
 『周仏海日記』と照合すると、儲備券印刷費用に充てられたとみられる。

第5表 『周仏海日記』から判明した汪政権による主な対日借款
 (日付は主に調印日, 1940年頃の換算レート1円≒1元)

年月日	金額および目的
1940年3月29日	4,000万元 (正金銀行経由)
同年5月10日	日英関税協定由来の上海市での当年4月分の関税剰余信用契約
同年12月24日	5,000万元 (銀行資本の一部として, 華興商業銀行*経由) *日本の傀儡の維新政府(南京)の銀行
1941年2月28日	300万元 (華興銀行経由か)
1941年6月21日	3億円相当の貨物取引による信用借款決定
1942年6月10日	3,500万元の兵器 (武器・被服等軍需物資の当座貸越)
同年7月28日	日本円1億円 (儲備銀行券印刷用)
同年8月3日	日本円3,000万円 (儲備銀行券印刷用)
1943年6月10日	(金額不明)日本から金塊を持ち込み, 利益を中央儲備銀行に帰属
1944年12月15日	金券発行準備として金塊 (少なくとも20トン) を運ぶよう依頼

2) 治安維持費・軍事費の膨張

安定した収入源として占領地経営を目指した清郷工作は1942年5月の影佐の左遷に伴い、

彼に後ろ盾を求めた現場責任者 李士群が失脚し、自然消滅した。そして、もともと面従腹背であった占領地の治安維持費を含んだ軍事費は膨れ上がり、さらに汪政権の財政を圧迫した。

周仏海日記	
1942年 5月29日	…〔支那派遣軍総司令部付〕住谷〔主計〕大佐が来て軍事予算について相談する。…これまで日本軍部が支配してきた治安協力費及び物資統制設備費を…交付停止、清郷〔工作〕及び軍事経費に回してくれたのであり、そうでなければ本期の概算編成は実に難しかった。…
1943年 5月17日	…来年度予算編成を協議する。軍事費の膨張が巨額過ぎて、編成に手を着けられず、焦燥するのみ。…

3) 日本側都合による華北での中央儲備銀行券（儲備券）使用制限

日本が多額を出資した中央儲備銀行券（儲備券）の目的は、汪政権の通貨として中国全土に流通させ、法幣を駆逐することであった。しかし、華北では日本軍が物資調達に使用していた軍用手票（軍票）や中国聯合準備銀行券（聯銀券）の流通に支障をきたす、という日本側の都合により使用を制限された。それだけでなく、儲備券と聯銀券は直接交換することも出来なかった（軍票を仲介させれば可能）⁽²¹⁾。1937（昭和12）年以降、日本軍の軍事力により聯銀券による通貨統制ができており、聯銀券が儲備券に置き換わる、もしくは流通通貨に儲備券が加わるという不都合、また、軍票の価値に影響することを嫌ったためであった。



第30図 日本陸軍の経済謀略に使用された紙幣
左上から、時計回りに「軍用手票（軍票）」、
「中国聯合準備銀行券」、「中央儲備銀行券」
（すべて当館所蔵）

周仏海日記	
1941年 3月16日	…新法幣〔= 儲備券〕が順調に普及できない最大の障害はやはり日本の軍票である。日本は新幣に対し相変わらず徹底的な援助はしていず、口先ではうまいことを言うが実際には何もしないという性格がここにも見られる。…

4) 対法幣交換レート of 悪手

儲備券の普及を急ぐあまり、発行から約一年半後の1942（昭和17）年5月、もとは等価だった対法幣の交換レートを徐々に下げ1対2とすることを決定した（儲備券の価値＝法幣の1/2）。しかし、同時期に汪政権は南京市・上海市とその周辺三省で法幣の流通禁止と儲備券を統一通貨とすることを宣言したことにより、銀行での取り付け騒ぎが起こった。このとき儲備券はさらに信用を下げ、米物価などの急上昇を招いた。さらには敗戦間際、1944（昭和19）

年には悪性インフレに見舞われ、財政は壊滅的な状況に陥った。

周仏海日記	
1943年 3月4日	…〔知人との会話で〕たまたま新旧法幣〔＝儲備券と法幣〕を二対一で交換したことに話が及んだので、余は次のように言った。これは余の唯一の失敗であり、新旧法幣の等価交換を勝ち取れなかったことは今思っておいてもなお心が痛む。…

5) 政権内権力の腐敗

北京大使館情報課 大原実は「極秘」の出張報告書「同盟条約後の中支を観る」⁽²²⁾で、『周仏海日記』には記されない汪政権の実態を次のように報告している。(以下一部要約抜粋)

首都南京の印象は「沈滞の街」/ 汪兆銘の取巻や部下は皆最悪との噂 / 汪本人は言葉は立派だが節操がない / 汪の妻 陳璧君は食糧・アヘン関係を握り私腹を肥やす / 周仏海は税金と警察権力を手中にし蓄財に励む / 政権内幕は日本人好みの名文句で煙に巻き、思う存分占領地域の民衆の骨をしゃぶっている / 和平軍・保安隊・警察隊などは日本側に忠犬ぶりを装うが民衆に対しては狂犬であり強盗、陰では蔣政権に協力 / 重慶側から人望無いことは自覚しているはず

『周仏海日記』からは、周は、敗戦間際にインフレのため公務員給与の50～70倍の賃上げを日本側へ要求していたことがわかっている。さらに、周仏海の蓄財額は1944年末で約3.1キログラムの金の延べ棒75本分相当であった(2021年11月現在、金1g＝約7,000円換算で約16億3千万円相当)。

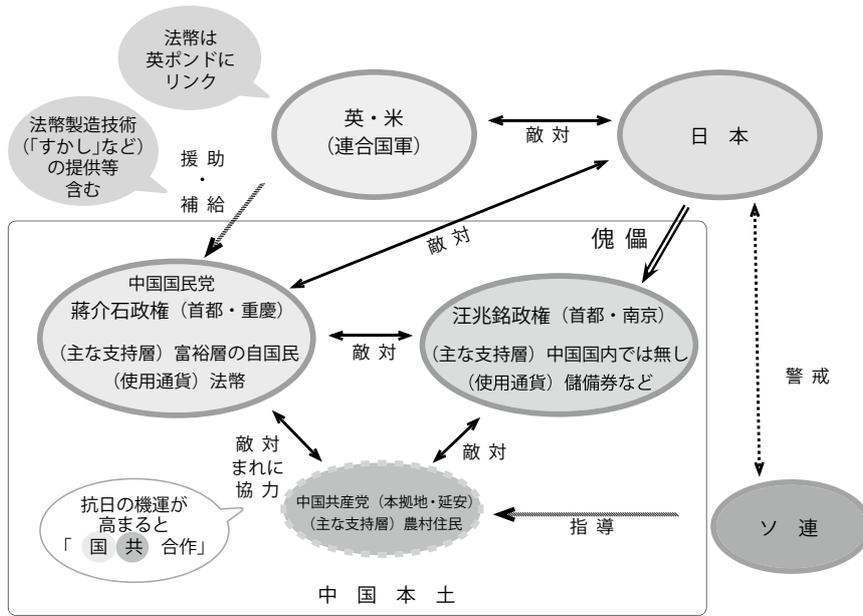
(2) 「強い」法幣とアジア太平洋戦争の関係

参謀本部が挑み続けた蔣介石政権の「法幣」。中国国内では圧倒的な信用度から、日本は法幣を駆逐することはおろか、弱体化ですらも不可能であった。

中国では歴史が浅い法幣制度であったが、法幣の高い信用度は英米の支援と技術に支えられていたため、法幣を駆逐しようとするのは英米に対する挑戦でもあった。そのため、法幣の偽札謀略は、「蔣介石政権とそれをサポートする英米」対「日本」という構図になっていた。

そもそも日米開戦を回避する条件として米国からの「ハル・ノート」では、日本に ①中国からの日本軍の撤兵 ②汪兆銘政権の否認 ③三国同盟の空文化 を求めている。

これらを履行できないと判断した日本は米国に対し開戦に踏み切った。したがって、主に太平洋上で展開された対米戦争は、日中戦争の延長線上にあると言える。また、中国本土での全面戦争は、対蔣介石政権だけでなく、当時農村を中心に力を伸ばしていた共産党勢力を加え、アジア太平洋戦争開戦直後は第31図のような構図になっていた。



第31図 1941年後半頃の汪兆銘政権と日本を取り巻く構図 (筆者作成)

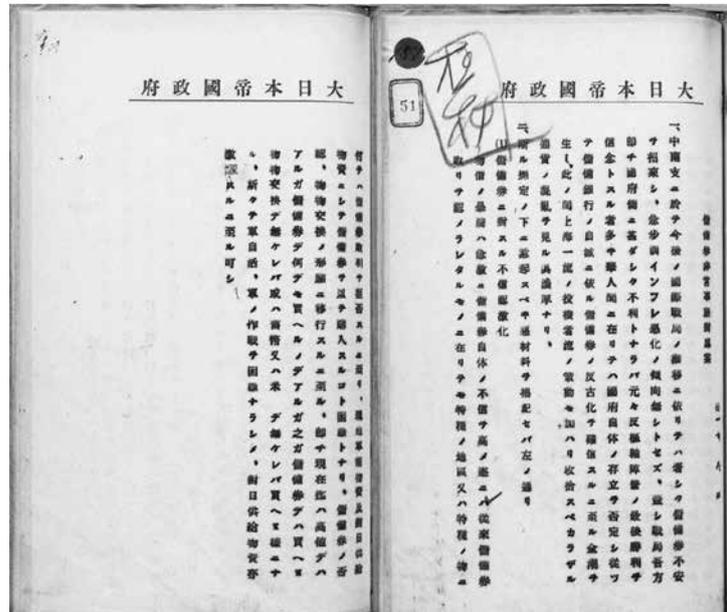
(3) 重要性を増す登戸研究所製の偽造法幣

蒋介石政権を弱体化させる手段としての登戸研究所の偽造法幣。ますますその重要性が高まった背景を見ていく。

① 儲備券の価値の低下

手書きで「極秘」と記された第32図は、戦局により儲備券が著しく価値を落とし、反故になる可能性を鑑みて出された対処案である。

その背景のひとつに、「儲備券に対する不信感激化」とあり、特種地区で物品(米など)を購入する際、儲備券の受取拒否が起こっており、将来的に使用できなくなると危惧され、ひいては、軍の作戦などに支障を来すだろうと報告されている。



第32図 昭和17年8月4日付「儲備券非常事態対処案」(部分, 国立公文書館所蔵/アジア歴史資料センター公開 Ref.A17110555000)

② 聯銀券、軍票の限界

儲備券と同時期に併用されていたのが、謀略の一環で使用された華北の聯銀券や華中・華南で通貨として使用されていた軍票であったが、これらは次に挙げる理由から、法幣を駆逐する勢力として儲備券の代役にはなり得なかった。寧ろ、聯銀券と軍票の欠点を補う工作として儲備券の普及が画策されたのである⁽²³⁾。

聯銀券…日本軍の軍費として使用され、日本の軍事力が及ぶ（抗日勢力を抑え込め得る）地域での使用を限定された管理通貨

軍票…「軍行動の自由と生命確保のための経済武器」⁽²⁴⁾で、物資調達と軍票の価値の維持が軍の生命線であり、日本軍の豊富な物資に対する信用を基礎に交換が成立するため、法幣を攻撃（駆逐）する性質を持ち合わせない

③ 奥地での「法幣一強」

日本の中国本土での占領地は広大な大陸においてはごくわずかで、少し奥地に行けば法幣しか通用しないことが普通であった。そのため、大陸奥地での戦時物資調達のためには偽造法幣は非常に有効だった。

④ 唯一残された「法幣の偽造」という対抗手段

儲備券による法幣の駆逐や弱体化が期待できなくなると、蒋介石政権を弱体化させるため「偽造」法幣を大量に流通させることで経済攪乱^{かくらん}を起こす、という謀略が最後の手段として残った。この謀略成功のカギは1) 流通ルートの確保と2) 量産体制の確立にあった。

1) 流通ルートの確保

この偽造法幣謀略のため、^{さかたしげもり}阪田誠盛の阪田機関を中心としたルート（当館第四展示室で紹介）に加え、敵側への流通拠点である^{ハンブク}蚌埠〔安徽省北部〕に参謀本部の岡田芳政が機関長を務めた松機関の支部や関門を設置、敵側との直接交渉取引も行った。

山本が偽造法幣で阪田機関が購入したものを参謀本部へ報告していたことがわかる資料も現存する（第35図）。

2) 量産体制の確立

偽札を大量に流通させるためには、当然、量産する必要があった。戦時中、日本銀行券や植民地（満州、朝鮮、台湾）の紙幣を製造していたのは、本来、内閣印刷局のみで、聯銀券、儲備券などを製造する程の余力は無かった。そのため、聯銀券、儲備券については、偽造防止を期待できる程に高度な製紙や印刷技術を持つ民間企業などが選ばれ、製造にあたった。分担などを整理すると、これら企業、機関と登戸研究所第三科との紙幣製造機関同士のネットワークが示唆される。

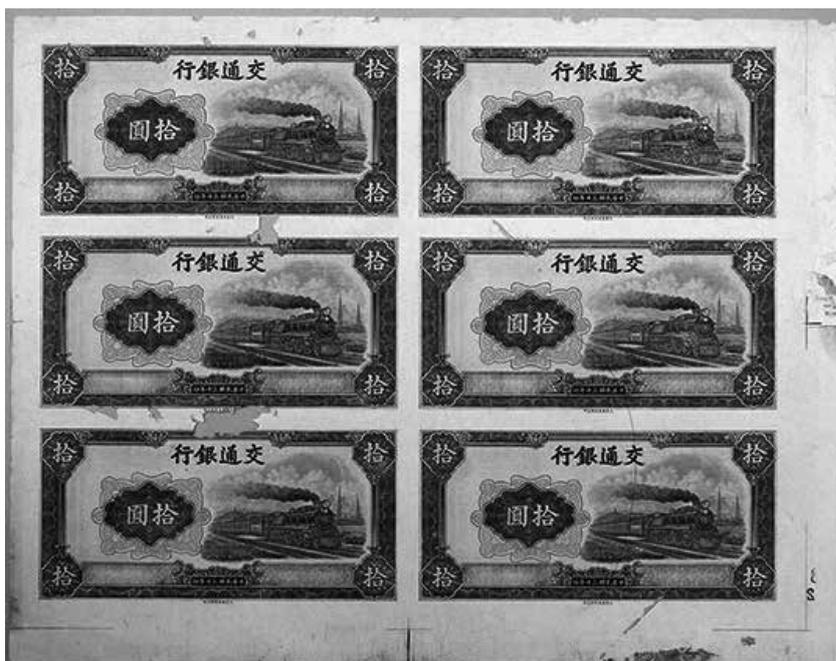
第6表 戦時中の日本における対中謀略に関する紙幣製造機関（筆者作成）

券種 分担	軍票 蒙疆銀行券 華興商業銀行券	聯銀券 (華北)	儲備券 (汪兆銘政権)	偽造法幣	
製紙	福井・越前和紙組合, 巴川製紙所?	越前和紙組合	越前和紙組合 ⁽²⁵⁾ , 巴川製紙所?	巴川製紙所, 特種製紙	陸軍登戸研究所 第三科
印刷	凸版印刷				
関係機関	内閣印刷局（1943（昭和18）年11月以降は大蔵省印刷局）				

- * 企業名は判明しているもののみ
- * 越前和紙組合の1942（昭和17）年以降の名称は越前製紙工業小組合
- * 巴川製紙所と凸版印刷はともに社長が実業家の井上源之丞
- * 登戸研究所第三科は敗戦直前に福井県へ疎開
- * 内閣印刷局は登戸研究所に技術指導

1940～41年頃には、民間製紙会社により、登戸研究所が単独で偽造法幣用紙の量産を可能にする「漉かし」を含む技術が完成していた。また1942年には、香港の法幣印刷工場から法幣と同じ材料・製造機械を接収したことにより「ホンモノ」同様の偽札製造が可能になった。

このように偽札の量産体制が確立した登戸研究所の第三科への期待はさらに高まり、敗戦まで第三科は規模を拡大し続けた。



第36図 登戸研究所製造
「六連偽札」原本
(当館所蔵/渡辺賢二氏寄贈)
戦後、日本国内で発見された。裁断・ナンバリング前に不良品としてはじかれたと思われる、登戸研究所で偽造されたとされる「中国交通銀行10元券」。



第37図 登戸研究所で製造された偽造法幣と同じ種類の法幣（当館所蔵）

左上2種：トーマス・デ・ラ・ルー社製中央銀行10元券と5元券，左下2種：ウォータールー・アンド・サンズ社製中央銀行10元券と5元券，右上・中：トーマス・デ・ラ・ルー社製中国銀行10元券と5元券，右下：アメリカン・バンクノート・カンパニー社製中国銀行10元券

英国製のトーマス・デ・ラ・ルー社とウォータールー・アンド・サンズ社製の券面中央部縦には絹繊維の「抄き込み」と、右側に「漉かし」が入っている。米国系のアメリカン・バンクノート・カンパニー社製のものには直径1ミリ程度の丸型小紙片が全体的に散らされ、抄き込まれている。登戸研究所ではこの絹の「抄き込み」と「漉かし」や紙片が入った用紙に紙幣印刷することで、この種の偽造法幣を大量生産できるようになった。偽造法幣は大量に流通させる必要があったため、工作開始当時の最高額面10元券が偽札工作の中心的役割を果たし、5元券は補助的であった。

おわりに

登戸研究所で製造された「偽札」とその工作について初めて見聞きしたとき、なんと滑稽で愚かな作戦と感じた方も多かったのではないだろうか。しかし、参謀本部の対中国謀略を概観したうえで偽造法幣謀略を検証すると、傀儡政権を成立させようとする政治謀略や他の経済謀略に並行して行われたこの工作は、打倒・蔣介石政権＝法幣の枠組みで考えると、重要な経済謀略であったと言える。

たかが「偽札」で戦争に勝てるわけがない—だが、影佐機関が全てを賭した汪兆銘政権にかかる工作に暗雲が立ち込めた時、登戸研究所が製造した偽造法幣は、「引いては終えられない戦争」を継続するために残された、一条の希望の光のようなものだったのかもしれない。

「偽札」や「謀略」に感じた滑稽さや愚かさは、今、私たちが生きる現代社会にも形を変えて存在しているような気がしてならない。今回の企画展が、皆様にとり、何かを考えるきっかけとなれば幸いである。

謝辞

本稿は、2021年度に開催された明治大学平和教育登戸研究所資料館主催第12回企画展「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略—アジア太平洋戦争開戦80年—」の記録を目的として、企画展の展示内容にその後の研究結果をふまえて加筆・修正したものである。

また、この企画展を開催するにあたり、下記の方々、機関にご協力、ご後援いただいた。ここに記し、感謝申し上げます。(敬称略・個人-機関、五十音順)

協力 大島規弘 / 塚本英史 / 狛江市教育委員会 / 防衛省防衛研究所戦史研究センター
後援 川崎市 / 川崎市教育委員会

〔注〕

- (1) 二回目の人体実験の時期は1943年としている資料もある(木下健蔵『日本の謀略機関陸軍登戸研究所』(文芸社、2016年)など)。
- (2) 偽札製造に関する一連の流れは、山本憲蔵『陸軍贋幣作戦』(現代史出版会、1984年) pp.56, 57, 61, 63をもとにしている。
- (3) 太陽インキ製造社史編纂委員会編『太陽インキ製造50年のあゆみ』〔歴史編〕(太陽インキ製造、2003年) p.4。
- (4) 桑野仁『戦時通貨工作史論』(法政大学出版局、1965年) p.14。
- (5) 有賀傳『日本陸海軍の情報機構とその活動』(近代文藝社、1994年) p.55。
- (6) 犬養健『揚子江は今日も流れている』(文藝春秋新社、1960年) p.126。
- (7) 影佐禎昭「曾走路我記」白井勝美解説『現代史資13日中戦争5』所収(みすず書房、1966年) p.351。
- (8) 防衛省防衛研修所戦史室『戦史叢書 支那事変陸軍作戦<3>』昭和16年12月まで(朝雲新聞社、1975年) p.26。
- (9) 塚本誠『或る情報将校の記録』(非売品、中央公論事業出版、1971年) p.243。
- (10) 蔡徳金編、村田忠禧訳『周仏海日記』(みすず書房、1922年) p.11, 1937年8月8日注記。
- (11) 同前, p.82, 1938年7月22日注記。
- (12) 防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref.C11110699300 および C11110699400 より

日華協議記録

昭和十三年十一月二十日、日本側影佐禎昭、今井武夫の両名は中国側高宗武、梅思平の両名と左記の如き内容を協議成立せり

左記

第一 日華両国は共産主義を排撃すると共に侵略的諸勢力より東亜を開放し東亜新秩序建設の共同理想を実現せんが為め相互に公正なる関係に於て軍事政治、経済、文化、教育等の諸関係を律し善隣友好、共同防共、

経済提携の実を挙げ強固に結合す之が為左記条件を決定す

第一条 日華防共協定を締結す

其内容は日独伊防共協定に準じて相互協力を律し且日本軍の防共駐屯を認め内蒙地方を防協^(マア)特殊地域となす

第二条 中国は満州国を承認す

第三条 中国は日本人に中国内地に於ける居住、営業の自由を承認し、日本は在華治外法権の撤廃を許容す又日本は在華租界の返還をも考慮す

第四条 日華経済提携は互惠平等の原則に立ち密に経済合作の実を挙げて日本の優先権を認め特に華北資源の開発利用に関しては日本に特別の便利を供与す

第五条 中国は事変の為生じたる在華日本居留民の損害を補償するを要するも日本は戦費の賠償の要求せず

第六条 協約以外の日本軍は日華両軍の平和克復後即時撤退を開始す

但し中国内地の治安恢復と共に二年以内に完全に撤退を完了し中国は本期間に治安の確立を保証し且駐兵地点は相方会議の上之を決定す

第二 日本政府に於て右時局解決条件を発表せば汪精衛氏〔汪兆銘の別名〕等中国側同志は直に蒋介石との絶縁を^(せんめい)闡明し且東亜新秩序建設の為め日華提携並反共政策を声明すると共に機を見て新政府を樹立す

昭和十三年十一月二十日

日本側	影佐禎昭
	今井武夫
中国側	高宗武
	梅思平

- (13) 前掲『周仏海日記』p.107, 1938年10月6日注記。
- (14) 「日支新関係調整要綱」合意に至るまでの周仏海らと梅機関員による7回の協議議事録は、白井勝美解説『現代史資料13日中戦争5』（みすず書房, 1966年）pp.249-301を、また、往復書簡は同書pp.316-335を参照されたい。
- (15) 本誌p.114【資料3】参照。
- (16) 前掲『戦史叢書 支那事変陸軍作戦<3>』昭和16年12月までpp.243-251。
- (17) 清郷工作については、主に、同前、『戦史叢書 支那事変陸軍作戦<3>』昭和16年12月までpp.414-421および晴気慶胤『謀略の上海』（東亜書房, 1951年）pp.224-264に依拠する。
- (18) 凸版印刷株式会社社史編集委員会『凸版印刷株式会社六拾年史』（凸版印刷, 1961年）p.130。
- (19) 前掲『周仏海日記』p.279, 1940年12月17日注記によれば、「一、中央儲備銀行は貨幣の発行、兌換の特権を有し、その名称も「法幣」と称する〔実際は「中央儲備銀行券（儲備券）」と称して発行された〕。およそ納税、為替及び一切の公私の往来に、一律に行使し、現行の法幣〔蒋介石政権の法幣〕等の貨幣と流通し、以後次第に取って変わってゆくものとする。二、華興銀行〔汪政権以前の日本の傀儡政権「中華民国維新政府」の銀行〕の貨幣発行権は取り消す。三、中央儲備銀行券は特定の地区〔＝華北〕では暫くの間適用せず、軍票及び聯銀券が現状を維持する。」と規定されていた。〔太字は筆者による。〕
- (20) 商品の移動に課せられる通貨税の代わりにの税。一ヶ所で課税すれば、他の地方に運んでも課税されない。
- (21) 山本憲蔵『陸軍贖札作戦』（現代史出版会, 1984年）p.47。
- (22) 渡辺賢二氏所蔵 大原実『在北京（昭、十七、八年）参考資料』（非売品）収蔵。
- (23) 前掲『戦時通貨工作史論』p.118。
- (24) 同前, p.110。
- (25) 渡辺賢二氏より聞き取り（2021年10月）。

〔参考文献〕（編著者五十音，刊行年順）

浅田百合子『日中の架け橋 ～影佐禎昭の生涯～』（新風社, 2003年）
有賀傳『日本陸海軍の情報機構とその活動』（近代文藝社, 1994年）

- 犬養健『揚子江は今も流れている』（文藝春秋新社，1960年）
- 今立町誌編纂委員会編『今立町誌』第一巻（今立町役場，1982年）
- 岩畔豪雄『岩畔豪雄氏談話速記録』日本近代史料叢書（日本近代史料研究会，1977年）
- 臼井勝美解説『現代史資料 13 日中戦争 5』（みすず書房，1966年）
- 大蔵省印刷局『大蔵省印刷局百年史』第3巻（印刷局朝陽会，1974年）
- 岡田芳政「中国紙幣偽造事件の全貌」（『歴史と人物』1980年10月号，中央公論社，1980年）
- 影佐禎昭「曾走路我記」 臼井勝美解説『現代史資料 13 日中戦争 5』所収（みすず書房，1966年）
- 木之内誠編『上海歴史ガイドマップ』増補改訂版（大修館書店，2011年）
- 木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日出版社，1994年）
- 熊野三平『「阪田機関」出動ス』（展転社，1989年）
- 桑野仁『戦時通貨工作史論』（法政大学出版局，1965年）
- 斎藤岩男『越前和紙のはなし』（越前和紙を愛する今立の会，1973年）
- 蔡徳金編，村田忠禧訳『周仏海日記』（みすず書房，1992年）
- 篠田隼，伴繁雄「登戸研究所の秘密」（『陸戦兵器総覧』，日本兵器工業会，1977年）
- 柴田善雅『占領地通貨金融政策の展開』（日本経済評論社，2005年）
- 太陽インキ製造社史編纂委員会編『太陽インキ製造 50年のあゆみ』[歴史編]（太陽インキ製造，2003年）
- 塚本誠『或る情報将校の記録』（非売品，中央公論事業出版，1971年）
- 徳永清之「華興商業銀行券の機能」（京都帝国大学経済学会『経済論叢』第50巻第1号，1940年）
- 凸版印刷株式会社社史編集委員会『凸版印刷株式会社六拾年史』（凸版印刷，1961年）
- 秦郁彦編『日本陸海軍総合辞典』[第2版]（東京大学出版会，2005年）
- 晴気慶胤『謀略の上海』（東亜書房，1951年）
- 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版，2001年，新装版2010年）
- 防衛省防衛研究所戦史室『戦史叢書 支那事変陸軍作戦<1>』昭和13年1月まで（朝雲新聞社，1975年）
- 防衛省防衛研究所戦史室『戦史叢書 支那事変陸軍作戦<3>』昭和16年12月まで（朝雲新聞社，1975年）
- 防衛省防衛研究所戦史室『戦史叢書 支那事変陸軍作戦<2>』昭和14年9月まで（朝雲新聞社，1976年）
- 山本憲蔵『陸軍贖札作戦』（現代史出版会，1984年）
- 若松会『陸軍經理部よもやま話』（非売品，若松会，1982年）
- 渡辺賢二『平和のための「戦争論」』（教育史料出版会，1999年）

第12回企画展「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略—アジア太平洋戦争開戦80年—」展示資料一覧

本稿 図表番号	資料名	所蔵者	資料館所蔵 資料番号
第3図	「状況申告」(部分)	登戸研究所資料館	567-1
第4図	伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』原稿複製	登戸研究所資料館	152
掲載なし	パネル「缶詰型爆弾」複製(複製製作:登戸研究所資料館)	登戸研究所資料館	(元資料)146
掲載なし	パネル「放火謀略兵器・万年筆型破傷器」複製 (複製製作:登戸研究所資料館)	登戸研究所資料館	(元資料)149
掲載なし	岩畔豪雄写真複製(複製者:大島康弘氏か)	登戸研究所資料館	718
掲載なし	山本憲蔵写真複製(複製者:大島康弘氏か)	登戸研究所資料館	722
掲載なし	影佐禎昭写真複製(複製者:大島康弘氏か)	登戸研究所資料館	725
第26図	「昭和18年12月12日 中支ニ於ケル清郷工作ニ関スル 調査報告書」(非売品, 1943年『在北京(昭. 十七, 八年) 参考資料』所収)	渡辺賢二氏	-
第30図	日本陸軍の経済謀略に使用された紙幣 ([軍用手票(軍票)], [中国聯合準備銀行券], [中央儲備銀行券])	登戸研究所資料館	678, 855, 856
第36図	登戸研究所製造「六連偽札」	登戸研究所資料館	61
掲載なし	「儲備券用紙綴」より 偽造法幣試抄紙 (昭和16年7月9日14時30分抄造)	登戸研究所資料館	1230-277
掲載なし	「儲備券用紙綴」より 偽造法幣試抄紙 (昭和16年6月6日11時30分抄造)	登戸研究所資料館	1230-265
第37図	登戸研究所で製造された偽造法幣と同じ種類の法幣 (トーマス・デ・ラ・ルー社製中央銀行10元券, 同5元券, ウォータールー・アンド・サンズ社製中央銀行10元券, 同5元券, トーマス・デ・ラ・ルー社製中国銀行10元券, 同5元券, アメリカン・バンクノート・カンパニー社製中国銀行10 元券)	登戸研究所資料館	34, 35, 36, 37, 1938, 参考 2-O1-12-001, 参考 2-O12-10-007